

Two Tibetan Versions of the *Mahādevasūtra*  
Restored from  
Two Quotations in the *Bhaiṣajyavastu* in the  
*Mūlasarvāstivāda-vinaya*:  
Tibetan Texts with Their Annotated Japanese  
Translations

by YAO Fumi

The *Mūlasarvāstivāda-vinaya* contains a huge number of quotations from sūtras in the Āgamas of the selfsame school. In not a few cases, passages are quoted from among sūtras now missing for some reason, and they can be ideal sources to restore the content of the missing sūtras. One of them is the passages quoted twice in different contexts in the *Bhaiṣajyavastu*, which represent the *Mahādevasūtra* transmitted in the Mūlasarvāstivāda tradition. While the extant Sanskrit manuscripts and the Chinese translation quote the sūtra in a considerably abbreviated form, Tibetan translation provides the entire text in these two quotations, as is commonly found in the translation of the vinaya. I will present in this article these two Tibetan texts with annotated Japanese translation.

Worthy of note is that the two quotations preserved in the Tibetan translation do not show complete agreement with each other, but provide difference that betrays the following two facts: the process of the compilation of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*, and the way of translation of the text into Tibetan language. Now that I have carefully discussed the former in another paper, I will examine the latter in this article in full detail. The distinguishing discrepancy in sentence structure and vocabulary shown by these two quotations alludes to the process of translation of this exceedingly large chapter: the translators of these two parts did not refer to each other.

# 根本説一切有部律に引用される

## *Mahādevasūtra*

——テキストおよび訳注——

八尾 史

### 1 はじめに

#### 1.1 趣旨

インド仏教諸部派の中の有力な一派であった根本説一切有部は、他の部派と同様に独自の経蔵すなわちアーガマ（阿含）を有していたと考えられている。今日ではそれらの經典群をパーリ上座部のニカーヤのような完全な形でみることができず、サンスクリット写本、漢訳、チベット語訳、他文献への引用といった断片的な資料からその一部分を知りうるのみであるが、その中でこの部派の律蔵たる『根本説一切有部律』（*Mūlasarvāstivāda-vinaya*、以下『根本有部律』）に多量の引用の含まれることが知られている。これは失われた阿含の文面やその構成を伝える資料として質・量ともに具えた重要なものであり、筆者は現在その一々を律から抽出し調査する作業を進めている。

本稿ではその成果の一部として、『根本有部律』の中でも特に經典引用の多い一章である *Bhaiṣajyavastu*（「薬事」）から、*Madhyamāgama*（中阿含）に所属する *Mahādevasūtra* 全文のチベット語訳テキストとその和訳を掲げる。

この經典の引用には注目すべき点がある。「薬事」の中で二箇所、異なる文脈において出現し、その双方の内容に相違点があるということである。『根本有部律』にはサンスクリット写本のほかに漢訳、チベット語訳が現存するが、

一方の箇所(A)ではサンスクリット写本が散逸し、漢訳は全文を省略し、チベット語訳のみがその全文を語る。他方(B)はサンスクリットが現存するが大部分省略されており、漢訳も同様で、やはりチベット語訳のみ完全形を伝える。問題の相違点とは、物語の筋立てにおける要素(段落)のうち、一方に存在し他方に存在しないものがあるということであって、共通の事柄についての記述はほぼ過不足なく一致していた。筆者は別稿において両者を比較検討した結果、上記Aが中阿含所属の一経を完全に伝えるものであって、Bはその同じ素材が「薬事」の文脈に合うように一部改変されたものであろうという結論を得た<sup>(1)</sup>。部派仏教における聖典形成のありかたを考えるうえで興味深い事例である。

パーリ経蔵における *Majjhimanikāya* 所属 *Makhādevasutta* を中心とする従来の研究では、対応経典が『根本有部律』に存在することは知られていたものの、そのチベット語訳は全文を掲げるにもかかわらず十分な注意を集めてこなかった<sup>(2)</sup>。特にAはその存在自体言及されることが少なく、西本龍山による漢訳中阿含への比定と J. L. Panglung による要約があるのみである<sup>(3)</sup>。本稿は根本有部伝の一経をはじめその完全な形で提示するものとなる。

## 1.2 訳文の相違にみるチベット語訳と「引用」の問題

本稿においてあらたに取りあげるのは、A・B双方のチベット語訳における訳文の相違である。すなわち、上に述べたような物語内容の相違とは次元を異

---

1 八尾 [2007]。

2 入山 [1998a], 入山 [1998b], 田辺 [1997: 131-134], 前田 [1959: 485-488], WALDSCHMIDT [1980: 139-144]。杉本 [1993: 256] はチベット律におけるBの所在を示す。

3 西本 [1933-1935: 112], PANGLUNG [1981: 24-25]。

にする、チベット語訳独自の問題である。

松村恒は、チベット語訳律蔵において同一の経典からの引用が複数個所に存在する場合、訳者によって「水平化」すなわち引用文の統一がはかられた可能性、およびサンスクリット原本で省略されていた引用文を訳者が（なんらかの形でサンスクリットの阿含原典を手にしていたとして、そこから）独自に補った可能性を提示している<sup>(4)</sup>。いま A・B 両方の *Mahādevasūtra* 「引用」文においても、この二点について可能性を検討しておく必要がある。そのためには A と B とのチベット語文を逐字的に対照することが必要となる。

全体に、A と B とで同じ内容を述べた部分では双方の記述がきわめてよく一致し、内容の相反する箇所は存在しない。しかしその一方で、チベット語の文面は必ずしも一致しない。このことは、サンスクリット原本では同一文であったのを別々に訳した結果、訳文の違いを生じたという成り行きを推測せしめる。相違にはおおまかにいって、語彙に関するものと構文に関するものの二種類がある。詳しくは訳注とテキストに示すとおりであるが、ここで A [4] とそれに対応する B-1 [3]<sup>(5)</sup>から例を引くならば、前者には

- ・ A : dbu/ B: mgo (頭。チベット語独自の敬語形と普通語形の違い)
- ・ A : 'dreg mkhan/ B: skra mkhan (理髪師)
- ・ A : lha'i pho nya/ B: gshin rje'i pho nya (神の使者/ヤマ神の使者。\**deva-dūta* を A は直訳、B は意識したものともみられる)

といったものがあげられる。助辞や接続辞の違いは枚挙にいとまがない。

後者の例としては、

- ・ A : skra dang kha spu 'dreg mkhan gyi mis 'chos pa na/

4 松村 [1994]。

5 内容把握の便宜のため、筆者による段落番号を附している。これは前述の拙稿で使用したものと同一であり、B は内容が途中で分断されているため前後を B-1、B-2 として分ける。

B : skra mkhan gyi mi skra dang kha spu 'chos pa na

は単純な語順の違いであり、

・A : nga'i dbu la skra dkar po skyes pa khyod kyis mthong dang lha'i pho nya byung ba yin gyis/ de'i tshe ...

B : gang gi tshe nga'i mgo las gshin rje'i pho nya skra dkar skyes pa mthong ba de'i tshe ...

はBが関係副詞を訳出すること、「白髪」が「神の使者」であることをAの方がより説明的に訳すことが違いを生じている。構文の違いは特に偈において顕著である。やや複雑なものとしては、直訳して意味を理解しがたい原語が別々の解釈によって訳された結果、当該単語を含む一文全体にわたる相違が生じたと考えられる例がある<sup>(6)</sup>。

一方、かならずしも訳し方の違いとはかぎらず、サンスクリット原典ですでに相違が起こっていた可能性のある箇所も、少ないながらもみいだされる。すなわち、

- ・B-1【5】にはAに存在しない一文がある<sup>(7)</sup>。
- ・逆にA【8】にはBに存在しない一句がある<sup>(8)</sup>。
- ・A【8】とB-1【7】では省略された文の末尾の位置（つまりどこまでが省略されたか）が異なっている<sup>(9)</sup>。

ただし、これらがチベット語に訳された際に過誤のために生じた相違でないといきることも困難である。第一の例では、問題の一文はその直後にある近似の一文と混乱したことを疑いうるし、第二の例はBの訳し落としでないとはいえない。第三の例でもA・Bそれぞれの省略の末尾の表現は似通っている

---

6 訳注28参照。

7 A【6】の注\*\*参照。

8 A【8】の注\*\*参照。

9 A【8】の注\*参照。

ので、一方は省略箇所を誤って訳したとみなすことも不可能ではないのである。

ただ、以上の相違を考慮すれば、次のことは言いえよう。チベット語訳者は決して離れているとはいいがたいこの二箇所において双方を別々に訳出し、一方の訳を他方に転用することはおろか、解釈の分かれうる語句について相互参照をおこなうこともなかったのである。この点、松村 [1994: 14] に指摘された *Viśvāntarāvadāna* の例とは対照的である。*Viśvāntarāvadāna* の例では「薬事」と *Saṅghabhedavastu* (「破僧事」) という離れた箇所にある同一の物語において、偈文が完全に一致する。「薬事」と「破僧事」の平行文に気づいてこれを統一したはずの翻訳者が、なぜ「薬事」内部の平行文を統一しなかったかはおおいに疑問であるが、現時点では説明がつきそうにない。A・B それぞれを含む部分の訳された時期が隔たっていたか、あるいは別々の訳者が担当したといった想定が可能かもしれないが、憶測の域を出ない。

さらに、A・B の間に文面上の相違が存在することからすれば、チベット語訳者が独自に引用文を補った可能性は、*Mahādevasūtra* の「引用」A・B については考えにくいとすべきであろう。訳者がそのような作業を行ったとすれば、A と B の平行性に意識的でなかったとは考えがたいから、相互参照が行われなかったということはいよいよもって不可解ということにならざるをえない。よってこの経典を省略しないサンスクリット写本が存在したとみるのが穏当であろう。

## 2 テキストおよび訳注について

### 2.1 方針

*Mahādevasūtra* のテキストおよび訳注を提示するにあたり、三つの目的からその形式をさだめる。

第一に、阿含經典の復元という目的からAを主体として扱う。訳注においてはできるかぎりサンスクリット原語を想定した訳出をおこない、Bでサンスクリット文の存在する部分についてはこれを優先し、チベット語訳が異なる場合には注記する。

第二に、AとBとの「引用」状況の相違を示すため、Bについてもテキスト、訳注両面からその物語展開をたどりうるようにする。

第三に、AとBとのチベット語訳の相違を明瞭にするため、両者が対応する箇所ではテキストをそれぞれ対照してあらわし、また適宜訳注の中に注記する。

## 2.2 写本, 版本

チベット語訳は、チベット大藏經カンギル中の 'Dul ba gzhi (Vinayavastu) に含まれる。使用する写本、版本は以下のものである。

訳：Sarvajñādeva, Vidyākaraṅgīya, Dharmakara, Dpal-gyis Lhun-po

校閲：Vidyākaraṅgīya, dPal-brtsegs

- ・ D : Derge (sde dge) xylograph. The Nyingma edition of the sDe-dge bKa'-gyur. Oakland: Dharma Pub. 1980.
  - A : Kha 52b7-56b6
  - B : Kha 194b1-198a2
- ・ N : Narthang (snar thang) xylograph. New York: The Institute for Advanced Studies of World Religions (microfiches).
  - A : Kha 138a5-144b3
  - B : Kha 369a4-374b7
- ・ P : Peking xylograph. 影印北京版 西藏大藏經：大谷大學圖書館藏，東京：西藏大藏經研究會，1955-1961. No. 1030.

— A : Ge 48b6-52b2

— B : Ge 183a4-186b4

- ・ R : Tog (stog) palace Manuscript. New York: The Institute for Advanced Studies of World Religions (microfiches).

— A : Kha 55b4-61b4

— B : Kha 262b3-267b3

- ・ T : Tōyō Bunko Manuscript (T).

— A : Ja 184a8-189b2

— B : Ja 382b2-387a5

他にも参照すべき写本、版本は少なくないが、さしあたり D, P と R, T によって Tshal pa, Them spangs ma 両系統を押さえたものとする。底本は R とする。

サンスクリットと漢訳はこの経典の一部のみを残す。

- ・ サンスクリット

— A : 欠損

— B : GM 1. 111.17-114.6, GBM 1010.4-1011.6 (B-1 【1】【2】【8】 ~ 【10】、B-2 【1】【2】【8】 ~ 【12】 に相当)

- ・ 漢訳

義浄『根本説一切有部毘奈耶藥事』

— A : T.No.1448,24.30b6-8 (A 【1】 の途中で経名のみ挙げ以下省略)

— B : T.No.1448,24.58b28-59a13 (対応箇所はサンスクリット写本に同じ)

A・B 対応部分はそれぞれ左右ページに対照し、A と対応しない部分の B のテキストは A の末尾以降に一括して置く。A と B のチベット訳の相違点は B に下線で示す。A にのみ見られ B に欠如している語句は B の対応箇所に\*で示した。



### 2.3 訳注の形式について

固有名詞は原則としてサンスクリットからのカナ表記とする。文中の繰り返しを省略する表現 (...zhes bya ba nas/ ...zhes bya bar gong ma bzhin du'o//) は地の文との混同を避けるため 〈 〉 中に訳出する。

注は三種に分かれる。

注A：AとBの相違（内容，訳語の両方）に関するものである。これは各段落の末尾に\*を附して置く。

注B：主に語義を解説するものである。単語の意味，想定されるサンスクリット原語ないし原文（主に『根本有部律』, *Divyāvadāna*, *Mahāvvyūtpatti* に基く）等を記す。これは脚注として示す。

注C：異本との比較を示すものである。具体的にはサンスクリットとチベット語訳，漢訳の異同，および『根本有部律』以外の平行話との異同をここに記す。これも脚注に含まれるが，注Bと区別するため括弧で括ってあらかず（例えば注6）。諸異本については次節に述べる。

上記の分類はあくまで便宜的のものであり，内容によってはいづれに含めるか決定しがたい注も存在する。

チベット語ローマ字表記は拡張ワイリー方式による。

### 2.4 *Mahādevasūtra* の諸異本について

この経典については，諸学者によって多くの平行話が指摘されている<sup>(10)</sup>。

---

10 赤沼 [1931: 398b, 460b], 赤沼 [1958: 12, 167], 干潟 [1978: 92b, 115b], PANG-LUNG [1981: 24, 38], 入山 [1998a: 83-86] など。

以下に挙げるのはそのうち「(マハーデーヴァ) 王の白髪発見による出家」「(ニミ) 王の天界訪問」の両方ないし一方を物語の核とし、ある程度まとまった物語の体裁をなすものである。

- ・ *Abhidharmakośopāyikā* P, Mngon-pa'i bstan-bcos Tu86a7-87b8 本庄番号 [2050] (本庄 [1999: 87-88] に和訳がある。A の前半とはほぼ全同の内容) (AKUp と省略, 以下同)
- ・ 『中阿含經』 卷第十四, 王相應品「大天捺林經」第三 (T, No. 26, 1.511c21-515b2) (『大天』)
- ・ *Makhādevasutta*, MN, No. 83, II.74-83 (MS)
- ・ *Makhādevajātaka*, J, No. 9, I.137-139 (MJ)
- ・ *Nimijātaka*, J, No. 541, VI.95-129 (NJ)<sup>(11)</sup>
- ・ 『增壹阿含經』 序品 (T, No. 125, 2.551c5-552a22) (『増一序』)
- ・ 『增壹阿含經』 卷第四十八, 禮三寶品第五十・四 (T, No. 125, 2.806c21-810b19) (『増一48』)
- ・ 『六度集經』 卷第八・八十七「摩調王經」(T, No. 152, 3.48b25-49b23) (『六度』)
- ・ 『法句譬喻經』 卷第三十八 (T, No. 211, 4.608b8-608c12) (『法句』)
- ・ 『大寶積經』 卷第七十六 菩薩見實會第十六之十六 (T, No. 310, 11.431c17-432c16) (『宝積』)
- ・ 『經律異相』 卷第二十四, 「摩調金輪王捨國學道」七 (T, No. 2121, 53.132b27-132c28) (『經律』)

また次のジャータカは、主人公が異なるもののニミ王の物語と共通する部分が多いので適宜参照する。

- ・ *Sādhinajātaka*, J, No. 494, IV.355-374 (SJ)

---

11 NJ のテキスト形成史については入山 [1997], 入山 [2002] がある。

MJ, 『増一序』『法句』はマハーデーヴァのみ, 『宝積』はニミのみ, 他は両王の話語る。物語の体をなさず, 単に両王の事績に言及するものはここで触れない<sup>(12)</sup>。MSとNJ, 『大天』とMSについてはそれぞれ入山 [1998a], 入山 [1998b] に物語内容の比較がなされている<sup>(13)</sup>。

---

12 なおパールフト彫刻に Maghādeviya jataka と記銘されたものが存在する (杉本 [1993: 6-7] 参照)。

13 『葉事』サンスクリット部分について, 八尾 [2007] 執筆時に見落としていた Dutt 校訂の誤りを今回写本の再確認により発見したため, 本稿では訂正した形で掲載する。さきの論文で引用した部分もこれに応じて訂正する。

### 3 訳注

A 【1】 さて世尊はヴィデーハ国<sup>(1)</sup>を遊行なさったときに、ミティラー<sup>(2)</sup>に到着なさり、ミティラーのマハーデーヴァ<sup>(3)</sup>のマンゴー林に滞在なさった。

さて、世尊はある場所で微笑をお見せになった<sup>(4)</sup>。具寿アーナンダは世尊が微笑をお見せになったのを見た。見てから、また世尊にこのように申しあげた。

1 lus 'phags, Mvy. 3049: *Videha*, 赤沼 [1931: 763]。『増一48』「摩竭國蜜暎羅城」。

2 *Mithilā*, 赤沼 [1931: 426]。

3 lha chen po. B のサンスクリットからこの王名が *Mahādeva* であることはあきらかである。義浄訳 A 「莫訶提婆」 B 「大天」。MS, MJ, NJ, Makhādeva。『法句』の「南王皇帝」はニミ王と混同された可能性があろう。

4 平岡 [2002] によれば、「微笑」のモチーフはパーリにおいて過去物語を導入する定型句であったものが、授記（ブツダが将来ブツダとなる者に豫言を与えること）の場面を語りだす定型句へと発展した。特に説一切有部系の文献では、ブツダが口から光を放つという記述が加わって長大な定型句が出現し、これは「破僧事」にもみられる（平岡 [2002: 175-178, 318-323]）。岩本裕も *Avadānasārika* では仏の微笑は大体において授記と結びついていると記している（岩本 [1962: 97]）。

平岡によれば「如来、阿羅漢、正等覚者たるものは、因縁なくして微笑を現ずることはない」という文がパーリ聖典その他においてはアーナンダの質問の中のみあらわれるのに対し、「有部系の定型句」ではブツダの言葉にのみあらわれる、すなわち「唯一有部系の文献だけがこの系統から外れていることになるが、その理由については不明である」（平岡 [2002: 322-323]）。「有部系の定型句」でもアーナンダがこの趣旨のことを言わないわけではないが、偈の形をとり、パーリのそれとはかなり異なる文面となっているのである。今この *Mahādevasūtra* (A) をみるに、アーナンダの質問はパーリの簡潔な形に近く、ブツダがそれを繰り返す点では平岡の「有部系の定型句」に一致する、中間的な形態のものといえよう。まとめると「因なく縁なく」のフレーズは次のようにあらわれる。

有部以外：アーナンダ

有部系定型句：アーナンダ(偈)・世尊

A：アーナンダ・世尊

「大徳よ、如来、阿羅漢、正等覚者たちは因なく縁なくして微笑をお見せにならないならば、大徳が微笑をお見せになったその因は何でございますか、縁は何でございますか」

「アーナンダよ、そのとおりだ。そのとおりだ。如来、阿羅漢、正等覚者たちは、因なく縁なくして微笑をお見せにならない<sup>(5)</sup>。

\*BではA【1】【2】にあたる記述がなく、B独自の導入部B-1【1】がおかれている。

B-1【1】大王よ、さらにまた、わたしは無上正等覚を求めて（チベット訳「求めたので」）もろもろの布施を施し、もろもろの福德をなした。それを聞くがよい。

「大王よ」とはBでの聞き手であるコーサラ国王プラセーナジットへのよびかけである。A・Bそれぞれが律の中で語られる背景については八尾 [2007: 199-201] 参照。

A【2】アーナンダよ<sup>(6)</sup>、かつて人々の寿命が八万年あり<sup>(7)</sup>、寿命が八万歳の人々のこのジャンプ洲は富み、豊かで、平和で、豊年で、多くの民衆に満ちており<sup>(8)</sup>、（いちいちの）村・町・（諸小王の）王国・王都の間は鶏が飛んで行けるほどに近かった<sup>(9)</sup>。寿命が八万歳の人々に、身体の患いはこのようなものが生じた。すなわち寒さ、暑さ、飢え、渴き、欲望、食欲のないこと、老い<sup>(10)</sup>、である。寿命が八万歳の人々の娘を、[かの女が]生まれて五百歳に至ると[人々は] 夫に与えた<sup>(11)</sup>。それはあたかも今の十五歳か十六歳に至った者のようである。

---

5 *evam etad ānandaivam etat/ nāhetvapratyayam ānanda tathāgatā arhantaḥ samyakṣaṃbuddhāḥ smitaṃ prāviṣkurvanti/* 平岡 [2002: 176-177]

6 {この「時代」にかかわる記述は以下のものを除いて諸本にない。「時民之壽八萬歳也。」(『六度』T3.48c6-7)「人壽八萬歳。」(『経律』T53.132c1)}

7 Cf. GM 1.46, aśīṭivaṛṣasahasrāyūṣi prajāyām.

A [3] (B-1 [2]) アーナンダよ、人々の寿命が八万歳あったとき、転輪王<sup>(12)</sup>のマハーデーヴァとって、四方をことごとく征服し<sup>(13)</sup>、法をそなえ、法の王であり、七種の宝をそなえた者があらわれた。かれの七種の宝とはこのようなものであった。すなわち、輪宝、象宝、馬宝、珠寶、女宝、居士宝、第七のほかならぬ臣宝である<sup>(14)</sup>。かれにはまた、勇猛であり、勇敢であり、最もすぐれた肢体の姿をもち、敵の軍勢を破る<sup>(15)</sup>、千人もの<sup>(16)</sup>息子が生まれた。かれは海に至るまでのこの完全な、棘のない、害のない<sup>(17)</sup>大地を、処罰によってでなく、武器によってでなく<sup>(18)</sup>、法によって、平等に平定して暮らしていた。

8 以上五項目 (Mvy. 6413-6417) は「薬事」中の *Māndhātṛsūtra* にこの順でみられる (太字部分)。

*asti me jambudvīpe dvīpaḥ (sic) ṛddhaś ca sphītaś ca kṣemaś ca subhikṣaś cākīrṇabahujaṇamanuṣyaś ca pūrvavidehaḥ avaragodānīyaḥ uttarakuruś ca/GM,*  
1, 96.6-8

人の寿命が八万歳 (転輪王統治時代の特徴。山崎 [1994: 99]) であった時代の繁栄についてこれと似た定型句を出す経典およびその箇所を挙げるならば、*Cakkavattisihanādasuttanta* DN III.75.4、長阿含「轉輪聖王修行經」T1.41c、中阿含「説本經」T1.509c、「轉輪王經」T1.524b、「教曇彌經」T1.618c、「阿蘭那經」T1.682c、「佛説古來世時經」T1.830a。

9 Divy. に相当文がみられ、BHSD 184b (*kukkuṭasaṃpātamaṭra*) に引用されている。ただし、人寿八万歳時代の話ではない。

*kukkuṭasaṃpātamaṭrās ca grāmanigamarāṣṭrarājadhānyo babhūvuḥ.* Divy. 316. 11

ここでいう王国 (*yul'khor*, Mvy. 5509: *rāṣṭram*) は複数存在するものでなければならぬから、『因施設』にみえるような転輪王に服従する小王それぞれの領地をさすのであろう (佐古 [1996: 7-8])。

10 この諸項目は注8の用例中、相互に異なるところが多い。

11 Cf. DN III.75.4-5, *asītvassasahassāyukeṣu bhikkhave manussesu pañcavassasatikā kumārikā alaṃpateyyā bhavissanti.*

12 田辺 [1997: 132-133] が指摘するように、パーリ三本はマハーデーヴァを「転輪王」としない。『六度』『経律』は転輪王とはいわないが七宝、千子という特徴をあげている。

- 13 以下、転輪王の徳をあらわす慣用句が続く。Mvy. 3618, 3621-3636参照。この部分については「破僧事」と *Adhikaraṇavastu*（「滅諍事」）に平行文を見ることができ（ただし動詞の時制が異なる）。

*rājā bhavati cakravartī, caturantām vijetā, dhārmiko, dharmarājah, saptaratnasamanvāgataḥ; tasyemāny evaṃrūpāṇi sapta ratnāni bhavanti; tadyathā (1)cakraratnaṃ, (2)hastiratnaṃ, (3)aśvaratnaṃ, (4)maṇiratnaṃ, (5)strīratnaṃ, (6)gr̥hapatiratnaṃ, (7)pariṇāyakaratnaṃ eva saptamam; pūrṇaṃ cāsyā bhavati sahasraṃ putrāṇāṃ śūrāṇāṃ vīrāṇāṃ varāṅgarūpiṇāṃ parasainyapramardakānām; sa imām eva samudraparyantām mahāpṛthivīm akhilām akaṅṭhakām anuṭpīdām adaṅḍeṇāsastreṇa dharmeṇa samayenābhinirjityādhyāvatsyati; SBhV 1.49.6-14*（下線部分については注17参照）

阿含・ニカーヤにあらわれる転輪聖王については藤田 [1954], 山崎 [1994: 98-104]。

- 14 『大天』『増一48』は七宝の一々について詳述する。MSは七宝に言及しない一方、  
 王が「人民に対し法を行い、布薩を行った」ことを述べる。後半のニミ王物語  
 と共通する記述である。

- 15 Mvy. 3629-3633は以上四項目を転輪王の徳とするが、上掲の「破僧事」サンスクリット文をみるかぎり「転輪王の息子」にかかる形容詞であり、チベット語訳もそのように読むのが自然である。

- 16 転輪王の子については西村 [2005] に用例が集められている。注17の『根本有部律』, Divy. の用例はどれも *pūrṇaṃ ... bhavati sahasraṃ putrāṇāṃ* であるが、Mvy. 3629が *sātireka-putra-sahasrāṇāṃ guṇa-paddhatiḥ* 「千人以上の息子を有する王者の功德の形容語」という題目を立て、やや異なる。パーリ四部でこれに近い転輪聖王の説明はどれも *paro sahasaṃ*（たとえば DN I.89.4-5）で、やはり千人「以上」である。

- 17 今この部分の原語については *anuṭpīdām*, *anuṭpātām* のいずれとも決めがたい。「破僧事」（注13）および *Maitreyāvādāna* (Divy. 60.15-22), *Aśokavarnāvādāna* (Divy. 140.21-29) また *Rudrāyaṇāvādāna* (Divy. 548.23-549.2) の平行文では *anuṭpīdām* である。一方「滅諍事」(AdhikV 65.3-10) および Mvy. 3636では *anuṭpātām* である。CPD 205a '*anuppiḷā*' の項によれば、パーリでは国土の描写に *anuppiḷā* もしくは *anupapīḷā* もしくは *anupīḷā* の語が使われている。

- 18 チベット語は「処罰なく、武器をもって追い立てることもなしに」。

\*B-1 [2] 冒頭は「大王よ、かつてミティラーにマハーデーヴァ王という転輪王があり、四方をことごとく征服し、...」。Bでは聞き手が違うので（A [1] の注\*）、当然これ以降の「アーナンダよ」はない。

A [4] (B-1 [3]) さて、マハーデーヴァ王の髪と鬚とを理髪師<sup>(19)</sup>の男がととのえているときに、[王] 理髪師の男に告げた。

『おお、男よ<sup>(20)</sup>、余の頭に白髪が生えたのをおまえが見たとき、神（ヤマ神）の使者<sup>(21)</sup>があらわれたのだから、そのときは余に報告するのだぞ』

『王様、おおせつけの通りにいたしたく存じます』と理髪師の男はマハーデーヴァ王に答えた。

\*「余の頭に白髪が...」は、Bでは「おまえが余の頭からヤマ神の使者たる白髪が生えたのを見たときは、余に告げるのだぞ」。

A [5] (B-1 [4]) あるとき、理髪師はマハーデーヴァ王の髪と鬚とをととのえているときに、マハーデーヴァ王の頭に白髪が生えたことによって、神の使者があらわれたのを見た。見てから、マハーデーヴァ王にこのように告げた。

---

19 \* *nāpita?* Mvy. 9050: *nāpitabhāṇḍam* = 'dreg mkhan gyi lag cha.

20 kye nang rje. Negi VII. 2808a, *bhoḥ puruṣa*. なお、MSでは *samma kappaka* 「友、理髪師よ」と呼びかけている。

21 *lha'i pho nya*. *lha* (神) を B では明確に *gshin rje* (死王, Mvy. 3155: *yamaḥ*) とする。本庄 [1999] は「運命の使者」と訳して「*lha'i-pho-nya* (*deva-dūta*) であるが、本来 Skt. *daiva-dūta* であったと考える」と注記するが、Bの訳をみても、また MS '*devadūta*' のブツダゴーサ註に *devo ti maccu*. (MA III.310.19) と説くところをみても、「\**devadūta*/ ヤマ神の使者」とするのが穏当であろうと思われる。なお、MORRIS [1885] がこの語をとりあげている。MN, No. 130 *Devadūtasutta* には五種の '*devadūta*' が説かれるが、ここでいう「自分の頭に生えた白髪」はない。



『王様、御承知おきくださいませ。あなたさまの御頭に御白髪が生えたこと  
によって、神の使者があらわれてございます』

かれは告げた。

『おお、男よ、おまえはそれらの白髪を切らぬようにそっと抜いて、余の手にわたすがよい』

『王様、おおせつけ [の通りに] いたしたく存じます』

と理髪師はマハーデーヴァ王に答えて、それらの白髪を黄金の毛抜きで切らぬようにそっと抜いて、マハーデーヴァ王の手に置いた。

さてマハーデーヴァ王はその白髪を両手で引っ張って、この偈をとなえた。

『いまや、余の頭に若さを奪う [白い] 髪が生え、  
神の使者があらわれたので、余の出家<sup>(22)</sup>は時に至った』<sup>(23)</sup>

\* 「あなたさまの御頭に…」は、Bでは「御頭にヤマ神の使者たる御白髪が生えて  
ございます」

\*\* 「切らぬように」はBでは「順々に」。

A [6] (B-1 [5]) 『余は人々の欲の対象は享受しおえたので、余は神の諸欲  
の対象を求める時に至ったのだから、いまや余は年長の王子に王国の支配のため  
に主権を行使すること<sup>(24)</sup>を命じ、王仙の梵行を行おう』と考えて、さて、  
マハーデーヴァ王は王子を使者をもって召し出して、このように告げた。

『息子、王子よ、知るがよい。余の頭に白髪が生えたので、神の使者があら  
われた。余は人々の欲望の対象は享受しおえたので、余は神のもろもろの欲望  
の対象を求める時に至った。余は、息子、王子よ、おまえに海を果てとするこ

---

22 rab byung, Mvy. 9100: *pravrajyā*。

23 { この偈の内容は『大天』『増一序』『増一48』『法句』MJ, NJで一致し、『六度』  
『経律』MSは偈をもたない。 }

の大地を委ねるから、それをおまえは法にのっとって守るべきであって、非法によって [守るべき] ではない。ある者が非法を行うか、[法, 非法の] 混合した行いをなすならば<sup>(25)</sup>, おまえは [その者を] 王国に住まわせてはならない。

息子, 王子よ, おまえもまた頭に白髪が生えたのを見たときは, 神の使者がやってきたのだから, そのときはおまえもまた年長の王子に王国の支配のために主権を行使することを命じ, 王仙の梵行を行うがよい。このように息子, 王子よ, おまえはこのように [余によって] 始まった<sup>(26)</sup> 堅固なる善なる道を完成させねばならないのであって, 伝統を断絶してはならない<sup>(27)</sup>。最後の人となるな。息子, 王子よ, このような, 家系に生まれた賢明な人にとって<sup>(28)</sup>, そのような始まった堅固なる善なる道が存続しないならば, かれはかれらの伝統を断つ者であって, かれはかれらの中で最後の人となったのだ。だから, 余はおまえにこのように「おまえはこのように<sup>(29)</sup>, 家系に生まれた賢明な人と

24 rgyal srid kyi dbang phyug la dbang byed, Mvy. 6539 (rgyal po'i srid ...byed par 'gyur) : *rājyaiśvaryādhipatyam kārayati*. Cf. Aś I.170.12, jyeṣṭham kumāraṃ rājyaiśvaryādhipatyēṣu pratiṣṭhāpya また Divy. 122.13, ... rājyaiśvaryādhipatyē ... (単数形である以外は上記 Aś 引用文に同じ)。

*rājyaiśvaryādhipatyā* という複合語の解釈は假にチベット語訳に従ったが, L. Feer は Aś 上記箇所 の仏訳 (Feer [1891: 115]) で *rājya*, *aiśvarya*, *ādhipatyā* を並列させており (「王権, 支配権, 主権において即位させ」), いづれかに決定しがたい。

25 'dren mar spyod na を假にこのように訳す。'dren ma は『根本有部律』中でしばしば定型句にあらわれる *vyatimīśra* の訳語にあてられる。この定型句では *karman* を修飾して「(黑白が) 混合した (業)」をあらわす (GM 1, 255.6-10など)。あるいは D: 'dren par- を採って「[非法なることを] ひきおこすように行う」か。AKUp では *mi mthun par spyod na* 「ふさわしからぬしかたで行うとき」。

26 A [6] [18] [19], B-1 [5] [9] で *slol btod/ dod pa* あるいは *zhugs pa* と訳されているのは B-1 [9] のサンスクリットにある *pravṛtta/ pravartita* と考えられる。一応「始まった」に統一して訳す。A [8] の注\*\*\*\*参照。Cf. MS, *yena me idaṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihitaṃ anuppavatteyyāsi* ...

27 rgyun chad par mi byed cig. Mvy. 2012 (rgyun chad) : *prabandhoparamaḥ*。

して、そのような始まった堅固なる善なる道を完成せよ。伝統を断絶してはならない。最後の人となるな」と告げたのだ』<sup>(30)</sup>

\* 「...道を完成させねばならないのであって」はBでは「...道に従って歩まねばならないのであって」。

\*\*Bでは「最後の人となるな」の後に次の一文がある。「息子、王子よ、だれであれ、

28 チベット語訳の文意が理解しがたく、MSを参考にして訳出した。すなわち、

yasmiṃ kho, tāta kumāra, purisayuge vattamāne evarūpassa kalyāṇassa vaṭṭassa samucchedo hoti, so tesam antimapuriso hoti. 「実に息子、王子よ、ある purisayuga がいるとき、このような善なる掟の断絶があるならば、その者はかれらの最後の人である」。

ブッダゴーサによれば parisayuge (sic) ti vaṃsasambhaye purise 「purisayuga においてとは家系に生まれた人においてである」(MA III.311.22)。Aはこれと同様の解釈により \*puruṣayuga を skyes bu bzang po rgyud du byung ba と訳したものと思われる。原語が \*puruṣayuga であったことは AKUp から推測しうる。すなわち、gang kha cig 'di lta bu'i ngo bo'i skyes bu bzang po'i zung la 'jug pa 「このような賢明な人の二人組に入る者」は、yuga 「一対」を訳出したものであろう。一方 B の 'ga' zhiḡ skyes bu bzang po yod pa'i dus 'di lta bu la 「だれであれ、賢明な人がいたそのような時に」は、yuga を「時代」と理解した結果である可能性があろう。ただチベット語訳にあらわれる bzang po 「賢明な」はいかなる原文にもとづくものか解しがた。文意として「賢明な」人が善なる道を継がないというのは不審であるが、しかるべき家系に生まれたということにもとづく表現であろうか。あるいは一つの可能性として \*puruṣayuge sati というような絶対節の sati を as の現在分詞としてでなく形容詞とみて bzang po (Negi XII. 5521ab) の訳をあてたと考えることもできようが、憶測の域を出ない。

29 この文も前注同様チベット語文から直接意味を理解することが難しく、チベット語からはやや外れるが一応以上のように訳した。しかし前注で想定したような絶対節はここでは考えにくく、疑問が残る。AKUp のチベット語も文意がつかみがない。一方 B では「家系に生まれた賢明な人」の語がない。

30 〔諸本ともなんらかの形で出家の伝統が受け継がれたことに言及するが、MJ のみこれをまったく欠いている。〕

賢明な人がいたそのようなとき、このような歩まれた堅固なる善なる道に従うならば、その者はかれらの伝統を断絶しない者だ、その者はかれらの最後の人とはならないのだ」この文の有無によって前後の意味内容に齟齬をきたすことはないが、なぜ A と異なるのか疑問が残る。AKUp は A 同様この文を含まない。

A 【7】 (B-1 【6】) さてマハーデーヴァ王は年長の王子に王国の支配のために主権を行使することを命じてから、ミティラーのまさにそのマハーデーヴァのマンゴー林で王仙の梵行を行った<sup>(31)</sup>。

\* 「ミティラー」にあたる箇所が B では bcom brlag, Mvy. 4119: *Mathurā*。この場所が（ヴィデーハ国の首都）ミティラーであることは B でも冒頭に述べられている。Mithirā と *Mathurā* が混同されたものと思われるが、それがサンスクリット文の段階ですでに起こっていたかどうかはここでは決めがたい。AKUp には国名への言及がない。

A 【8】 (B-1 【7】) アーナンダよ、マハーデーヴァ王が年長の王子に王国の支配のために主権を行使することを命じた、その〔新王〕の名もまた転輪王マ

---

31 \* *rājarsibrahmacaryam acūrṣid. Mahāsudarśanāvadāna* (MATSUMURA [1988: 8. 8] など)。

MS, 『大天』『増一序』『増一48』『六度』では「出家」を具体的に述べる。... kesamassuṃ oharetvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagārikam pabbajī. MN II.76.5-7 「髪と鬚とを剃りおとし、袈裟色の衣をまとい、家から家なき状態へと出た」。NJ, 'bhikkhupabbajjāya pabbajitvā' は「王仙」としての出家に対立する表現として注目に値する。また根本有部伝では A 【5】の偈以外に「出家」(pra-vraj) という単語はあらわれないことになる。

なお転輪聖王が年老いて出家する話は阿含、ニカーヤ中の他の経典やジャータカにもみられる（山崎 [1994: 101, 203-205]）。また MS, MJ, NJ, 『増一序』『増一48』は王が四梵住（四無量心）を修したとする。

ハーデーヴァといって<sup>(32)</sup>、四方をことごとく征服し、〈というところから〉暮らしていた〈というところまで上のごとくである〉。さて<sup>(33)</sup>マハーデーヴァ王の髪と鬚とを理髪師の男がととのえているときに、〈というところから〉『かれはかれらの中で最後の人となったのだ』〈というところまで上のごとくである〉。さて、マハーデーヴァ王は年長の王子に王国の支配のために主権を行使することを命じてから、王仙の梵行を行った。アーナンダよ、[マハーデーヴァ王の]息子と、孫と、曾孫と玄孫など、そのようにひきつづいて八万四千人の<sup>(34)</sup>マハーデーヴァが、ミティラーのまさにこのマハーデーヴァのマンゴー林で王仙の梵行を行った。

\*繰り返しの部分、「...『かれはかれらの中で最後の人となったのだ』」は、Bでは『最後の人となつてはならない』までで、その方が直後の文に自然に接続する。

\*\*Bには「玄孫」がなく、これもチベット語に訳される段階で生じた相違か否か判別しがたい。AKUpは「息子と息子の息子と孫の孫」で、文字通りに取れば「曾孫」がない。

\*\*\*Bは地名への言及なし。

\*\*\*\*このあとBでは以下の部分が語られる。

B-1 [8] かれは自らの祭祀が完成したのを見て、この偈をとなえた。「神々、および人々の中において、主権を求めるならば、/貧窮への恐れをいだきつつ、能力のかぎり布施をほどこすべきである。/世間において、与える者は礼拝され、与える者は神々の中において [も] 礼拝される。/鳥にとって果樹が [よりどころである] ように、[かれは] あらゆる生き物のよりどころである」

B-1 [9] 大王よ、その時その折にマハーデーヴァ王という名の転輪王であり、彼によってかの堅固なる善なる道が始められ、その始まった堅固なる善なる道

32 { 子孫が代々マハーデーヴァという名であったとはこれ以外の諸本に見えず、根 }  
{ 本有部独自の伝承かもしれない。 }

33 { AKUpはここから第二代マハーデーヴァの梵行までを缺く。省略のしかたは諸 }  
{ 本かなり異なる。 }

34 [『六度』『経律』は「千八十四」と表記する。]

に依って、八万四千人のマハーデーヴァが王仙の梵行を行った、そのかれはほかの人であるとあなたは思うかもしれない。[が、] 実にそのように見られるべきではない。わたしこそがその時その折にかの転輪王マハーデーヴァ王という者であり、わたしこそが堅固なる善なる道を始め、その始まった堅固なる善なる道に依って、八万四千人のマハーデーヴァが王仙の梵行を行ったのである。

B-1 【10】 大王よ、わたしがその布施、あるいは布施の分配によって、無上正等覚を獲得したとあなたは思うかもしれない。[が、] そのように見られるべきではない。そうではなくて、わたしのかの布施は無上正等覚の因にすぎず、縁にすぎず、資糧にすぎなかったのである。

B-1 【9】 は聞き手の違いを除けば A 【16】 とほぼ同じである。日本語としては不自然であるものの、*'vartma pravartitam, 'vartma pravṛttam* を假に「道を始め」「始まった道に」と訳した。チベット語訳においては *pravartīta* と *pravṛtta* の区別は読みとりがたく、また訳語が一定しないこと（脚注26参照）に疑問が残るが、現時点では原因不明とせざるをえない。

B-1 【10】 では漢訳のみが大きくことなる。漢訳では「仏は告げられた。『大王よ、[わたしは] この布施を施すことと福德ある行為を縁としてのみ、正覚を證したのではない。大王よ、間違った考えをおこしてはならない。布施をおこない、正信をおこし、善根を積んだことを因として、今 [わたしは] 正覚を得たのである。』。」「正信」という項目を立てるのが特徴である。このほか B を含む前後の本生譚の多くで、漢訳にのみこの語がみられる。漢訳をみるかぎりでは、布施と福業だけでは不足で、布施・正信・善根がそろってはじめて正覚が得られるということになる。本生譚の最後の一話にはじめて過去仏が登場し、主人公が帰依する記述があることから、正信とはこれをいったものと読むことができる。サンスクリットと異なる理由は不明である。B-2においても同様である。

ここで B-1は完結し、つづいて後半の導入 B-2 【1】 がおかれる。これは B-1 【1】 と全同の文である。

A 【9】 (B-2 【2】) かれらの最後であるニミ王<sup>(35)</sup>という、法の王であり法をそなえ、法に立つ大王があらわれ、かれは王妃と、王子と、大臣と、兵士の隊長<sup>(36)</sup>と、都市の住民と、地方の住民とともに法を行い、もろもろの布施を施し、もろもろの福德をなし、斎戒を持し<sup>(37)</sup>、戒を保持していた。

\*B-2 【2】冒頭は「大王よ、かつてこのミティラーにかれらの最後であるニミ王という…法に立つ王があった。かれは王妃と…」

A 【10】(B-2 【3】) そのとき諸神の主シャクラは神の会堂スダルマーに集まって坐っている三十三神<sup>(38)</sup>の前で、讃歎を述べた<sup>(39)</sup>。

『友らよ、ヴィデーハの人々は利益をよく得た。というのも<sup>(40)</sup>、かのヴィデーハの人々の王ニミは、法の王であり法をそなえ、法に立つ大王であって、かれは王妃と、〈というところから〉戒を保持している〈というところまで上のごとくである〉。友らよ、君たちはニミ王を見ることを望むか』

『カウシカよ、大いに望んでおります』

『友らよ、それでは君たちは〔ここに〕とどまるがよい。そしてわたしがひとまづニミ王を見るところ』

\* 「諸神の主」すなわち *lha'i dbang po* (A) および *lha rnam kyī dbang po* (B) は、

---

35 *mu khyud*, Mvy. 3583: *Nemiḥ*。この王名には混乱がみられる。B-2のサンسكريットが残る部分では一貫して *Nimi* である。一方チベット語訳ではおおむね *mu khyud* と訳すものの、B-2に一部 *mu khyud ldan* の訳が見られる。義浄訳は泥彌多であるが、義浄訳の「泥」が *ni*, *ne* いづれの音写であるか判然としない（泥婆珊 / *nivāsana* (T23.729b18), 泥犁 / *niraya* (23.697b11), 泥薩祇 / *niḥsargika*, *naiḥsargika* (23.708a28), 阿難多泥彌 / *anantanemi* (23.1020c25), 泥波羅 / *nepāla* (23.738a21) など)。『根本有部律』においては *Nimi*, \**Nemi*, 泥彌多の三種が認められるわけである。ここでは一応ニミに統一して訳す。なお『大天』は「尼彌」, 『増一48』は「菴」, MSとMJは *Nimi*, 『六度』は「南」, 『経律』は「喃」。NJには一箇所 *Nemi* という名がみられる。すなわち出生の際に父王が *ayaṃ rathacakkanemi viya mama vaṃsaṃ ghaṭento jāto* (かれは車輪<sup>おおわ</sup>の輶 (*nemi*) のように余の家系を継いで生まれた) と述べて *Nemikumāra* と名づけたことになっているのである。

36 Mvy. 3714 (*khrom gyi ru*): *bhāṭabalāgrah*。

37 Mvy. 1629 (*bsnyen gnas la nye bar gnas pa*): *upavāsam upavasanti*。

原語としてそれぞれ \**devendra*/ \**devānām indra* の両方ともが可能と思われる。A・B の相違がかならずしも原語の相違とはかぎらないであろう。

\*\* 「戒を保持している」はBでは「ひとしく法を行い、戒を …」。

A 【11】 (B-2 【4】) さて諸神の主シャクラは、あたかも力ある男が曲げた腕を伸ばし、あるいは伸ばした腕を曲げるほど [の速さ] で<sup>(41)</sup>、三十三神の、神の会堂スダルマーから消えうせると、ミティラーのニミ王の宮殿にあった。そしてこのように告げた。

『ニミよ、そなたは利益をよく得た。というのも、そなたについて、神の会堂スダルマーに集まっている三十三神は讃歎を述べたのだ。「友よ、ヴィデーハの人々は利益を、〈というところから〉戒を保持している〈というところまで上のごとくである〉」。ニミよ、そなたは三十三神を見に行きたいか』

『カウシカよ、わたくしは三十三神を見に行きとうございます』

『ニミよ、それでは [ここに] とどまるがよい。そしてひとまづわたしはそなたに千頭の良馬をつないだ車をつかわすから、それにそなたは乗って、おそれることなく来るがよい』

『そのようにいたしましょう』

とニミ王は諸神の主シャクラに答えた。

---

38 sum cu rtsa gsum pa, Mvy. 3079: *trāyastriṃṣāḥ*。

39 { A 【11】 では以下の内容は三十三神が述べたことになっており、この記述と矛盾する。『大天』、『増一48』, MS, 『宝積』でははじめから三十三神が述べており、根本有部伝でも本来そのような形であった可能性がある。 }

40 Cf. MS, *lābhā vata bho videhānaṃ, suladdhaṃ vata bho videhānaṃ yesaṃ nimi rājā dhammiko dhammarājā ...* A・B を比較するに、サンスクリット原文はこのパーリ文に近い関係詞構文をなしていたと思われる。

41 *tadyathā balavān puruṣaḥ saṃmiñjitaṃ vā bāhuṃ prasārayet, prasāritaṃ vā saṃmiñjayet, evaṃ ...*, SBhV 1.121.11-13



\*Bでは「諸神の主シャクラは三十三神の中から消えうせると」と主語が重複する。チベット語の構文の違いが影響しているかもしれない。

\*\*「そのようにいたしましょう」はBでは「そのように願います」。

A【12】(B-2【5】) さて諸神の主シャクラは三十三神の中に行き、御者マータリ<sup>(42)</sup>に告げた。

『マータリよ、おまえは行って大急ぎで千頭の良馬をつないだ車を準備して、ニミ王のいるところに行ってこのように「ニミよ、そなたに諸神の主シャクラによって千頭の良馬をつないだ車がつかわされたので、これにそなたは乗って、おそれることなく来るがよい」と告げよ』

『カウシカよ、あなたさまがおっしゃったことはたいへんようございます』と御者マータリは諸神の主シャクラに答えて、大急ぎで千頭の良馬をつないだ車を準備して、ニミ王のいるところへ行ってこのように告げた。

『ニミよ、そなたに諸神の主シャクラによって千頭の良馬をつないだ車がつかわされたので、これにそなたは乗って、おそれることなく来るがよい』と言った。アーナンダよ、ニミ王は千頭の良馬をつないだ車におそれることなく乗った。

\*「あなたさまがおっしゃったことは...」は、Bでは「あなたさまがおっしゃったことによって間違いがございませんように」。

---

42 チベット語訳は *ma la gdu* で意味は不明。インドラの御者は *Mātali* (赤沼 [1931: 416a]) で、MS, NJ, SJ でも *Mātali*, 『宝積』は「摩多梨」, 『大天』『六度』は単に「御者」。ここでは一応マータリとする。有徳の人物を天界へ招待するためにマータリの車が遣わされるという記述はさまざまな物語に共通する(前田 [1959: 482-489])。『増一48』では派遣されるのが「窮鼻尼天女」である。

A 【13】 (B-2 【6】) さて御者マータリはニミ王にこのように告げた。

『ニミよ、そなたの車をどちらを通して導こうか。悪い業をもつ有情たちが悪い、不善の業の報いを受ける方を通してか、それとも善い業をもつ有情たちが善い業の報いを受ける方を通して導くのか』

『マータリよ、それではわたしに両方が見えるように、悪い業をもつ有情たちが悪い、不善の業の報いを受けるという場所と、善い業をもつ有情たちが善い業の報いを受けるという場所とを通して車を導くがよい』

さて、御者マータリはニミ王の車を、ニミ王に悪い業をもつ有情たちが悪い、不善の業の報いを受けるという場所と、善い業をもつ有情たちが善い業の報いを受けるという場所の両方がニミ王にありのままに見えるように導いた<sup>(43)</sup>。

\*最後の一文で、A は *rgyal po mu khyud kyis* 「ニミ王によって」が重複する。B では重複しない。

A 【14】 (B-2 【7】) アーナンダよ、ニミ王は三十三神の中に行って、ニミ王は神の会堂スダルマーに入り、諸神の主シャクラはニミ王に半分の座席を与え、ニミ王と諸神の主シャクラは半分づつの座席についた。アーナンダよ、ニミ王と諸神の主シャクラが半分づつの座席につくと、違いも、相違<sup>(44)</sup>も、区別もなかった。諸神の主シャクラは目を閉じることがないことをのぞけばである<sup>(45)(46)</sup>。

---

43 諸本中、NJ のみはこのあとで善悪業報見学の模様を詳細に語る。『阿毘達磨大毘婆沙論』はこの場面のみをとりあげている (T27.867b20ff.) から、なんらかの形で有部系の部派にも伝えられていたことがわかる。

44 *bsam pa*, \**abhiprāya*. BHSD 54b は Divy. 222.20 (注45参照) を引いて 'difference' の訳を与える。パーリ語の *adhippāya* の用例 (*viseso* および *nānākaraṇaṃ* と並列される) に基く。

A 【15】 (B-2 【9】) さて諸神の主シャクラはニミ王にこのように告げた。

『ニミよ、ここにとどまるがよい。ニミよ、そなたは楽しみをなすがよい。  
五欲の対象をそなえて遊ぶがよい。楽しみをなすがよい。快樂をなすがよい』  
するとニミ王はそのときこの偈をとなえた。

『借り物の器やいつきのものである車、  
それと同じくこの場所は他者に従属したものです。  
それゆえわたしはミティラーに行き、多くの善をなしてから、  
福德をなし、繁栄をなしたものととして、天に来るでしょう』と<sup>(47)</sup>。

\*B-2 【9】 の直前に B では以下の部分を置く。

B-2 【8】 かれもまた自分の祭祀が完成したのを見て、そのとき [この偈を] 唱えた。「善業をなす者たちを / 同様にまた不善業をなす者たちを見ても / 放逸

45 インドラ神やブツガが特定の人物に「半座を分かつ」行為については岩井 [2004] が詳しく、ニミ王の事例についても多くの平行文をあげている。岩井による指摘のうち、インドラ神に半座を与えられた人物はインドラ神と「容姿が等しい」という点はこの *Mahādevasūtra* においてそのままみとめられる。同様の場面は「薬事」中 *Māndhātṛsūtra* 引用部分にもあり、サンスクリットでは省略されているが *Māndhātāvadāna* からおおむね対応するサンスクリット文を得ることができる。

*śahacittotpādād eva Śakro devānām Indro rājño Māndhātur ardhāsanam adāt/ praviṣṭo rājā Mūrdhātāḥ Śakrasya devānām Indrasyārdhāsane/ na khalu rājño Mūrdhātasya Śakrasya devānām Indrasyaikāsane niṣaṇṇayoḥ kaścīd viśeṣo vā 'bhīprāyo vā nānākaraṇam vā yadutārohaḥaparīṇāhau varṇaḥpuṣkalatā svaraguptyā svaraguṣṭer nānyatra Śakrasya devānām Indrasyānimīṣatena/Divy. 222.16-22 (太字が *Mahādevasūtra* との対応部分)*

46 『増一48』ではニミも瞬きをしなかったことになっている。

47 [ NJ と SJ ではここにあたる偈がまったく同文である。『大天』も内容は一致する。 ]  
[ MS, 『増一48』『六度』『経律』『宝積』は偈がない。ついで『増一48』 MS, ]  
[ MJ, NJ はニミがマハ (カ) ーデーヴァ同様に出家したことを述べ、そのうち ]  
[ MJ 以外ではニミの子が出家の伝統を断つ。 ]

をなす人間ども / その最低の人どもはあわれむべきである」

チベット語訳ではこの部分の冒頭が「さてニミ王は...」となっているが、サンスクリットでは「かれもまた (*so'py*)」となっており、マハーデーヴァ王の物語との連続性が明確である。

\*\*この後 B では以下の部分を置き、B-1 【10】 と同文の B-2 【12】 で物語をしめくくる。

B-2 【10】 かれはミティラーに至ると、もろもろの布施を施し、もろもろの福德をなして、この偈をとなえた。「よい人々は、不幸のときに与えられた布施を称讃する。/ クシャトリヤ、婆羅門、ヴァイシュヤ、シュードラ、チャンダーラとブッカサに (与えられた布施を)。/ また飢饉において布施を与え、正しい人々を満足させるなら、/ この世で (来世の) 悪趣を避けてのち、天界において敬われる。/ この利益を知って、賢者たちは布施をほどこすべきである。/ 布施によって解脱、権力、神々の家 (天界) が得られる」と。

B-2 【11】 大王よ、その時その折にニミという名の転輪王であり、三十三天に行き神々の主シャクラによって半分の座席を与えられ、天の五欲の対象をそなえ具有して遊んだ、そのかれはほかの人であるとあなたは思うかもしれない。[が、実にそのように見られるべきではない。] わたしこそがその時その折にかれであって、わたしこそがミティラーに行って四つの城門にかの祭場を設置し、布施を与え、福德をなしたのである。

なお上記和訳中、「不幸のときに」は *āpatsu*。チベット語訳は *phongs la* (貧困において)。「悪趣」は *apāya* でチベット語訳は *ngan song* (悪趣)。この世に生きている間に来世で悪趣に生まれることを避ける意と考えられる。ただし、*apāya* をより一般的な意味にとって「この世でわざわざを避け」と考えることも可能であろう。またクシャトリヤからチャンダーラまではサンスクリットとチベット語訳が対応するが、チベット語訳では第六が *kla klo* (Mvy. 3874: *mlecchaḥ* 「外国人 (野蛮人)」)。サンスクリットにある *pukkasa* (= *pulkasa*, Monier 631a) は Mvy. 3872 では *gyung po* である。四ヴァルナと二種の賤民の列挙については山崎 [1986: 112-113] 参照。

B-2 【11】 で四つの城門に祭場 (*yajñavāta*) を設置したというが、これ以前の記述に見えない。「破僧事」(SBhV 1.120.1), NJ, SJ にも類似の表現がみられる。ただし「破僧事」では *yajñavāta* でなく *dānasālā* (施堂), NJ, SJ でも *dānasālā*。 *yajñavāta* を設置したという記述は「薬事」のプラセーナジット王への説法 (B を含む) の中で、アーダルシャムカ王とスダナ王の本生譚にもみえる (GM 1. 106-107, 122-123)。

チベット語訳は「わたしこそが…」につづき王の行いを完全に繰り返かえず。

A [16] (≡B-1 [9]) アーナンダよ、そのときその折にマハーデーヴァ王といって、その堅固なる善なる道を始め<sup>(48)</sup>、その始まった堅固なる善なる道によって八万四千人のマハーデーヴァがミティラーのまさにこのマハーデーヴァのマンゴー林で王仙の梵行を行った、その人がほかの人だと思うならば、おまえはそのように見るべきではない。それはなぜか、というならば<sup>(49)</sup>、アーナンダよ、わたしこそがそのときその折にマハーデーヴァ王といって、わたしこそがその堅固なる善なる道を始め、始まった堅固なる善なる道によって八万四千人のマハーデーヴァがミティラーのこのマハーデーヴァのマンゴー林で王仙の梵行を行ったのだ<sup>(50)</sup>。

A [17] それはなぜかというなら<sup>(51)</sup>、アーナンダよ、その時わたしには貪があり、瞋があり、癡があつて<sup>(52)</sup>、生、老、病、死、愁、悲、苦、憂、惱<sup>(53)</sup>から解放されていず<sup>(54)</sup>、苦から解放されていなかったのだ」  
と [世尊は] おおせられた。

「アーナンダよ、いまや、このわたしは世間に出現した師<sup>(55)</sup>、如来、阿羅漢、

---

48 A [8] の注\*\*\*\*参照。

49 B-1 [9] のサンスクリット文には「それはなぜか」にあたるものがない(チベット語訳にもない)。*Mahāsudārśanasūtra* のこれに近い箇所には *tat kasmād dhetoḥ* の一文がある。MATSUMURA [1988: 45, 47]。

50 {Aと『大天』、MSではマハーデーヴァがブツダの前生で、ニミとブツダの間に直接の関係が読みとれず、マハーデーヴァが梵天に再生したという記述もない。一方Bでは両王ともにブツダの前生である。『六度』、『経律』、MJ、NJもこれに近く、しかもマハーデーヴァが梵天界に生まれたのちニミとして人界に生まれたことを明言する。『宝積』はニミの話のみで、ブツダの前生とする。『増一48』ではニミはアーナンダの前生である。}

正等覚者、知と行いとを具えた者、善逝、世間を知る者、無上の調御されるべき人の御者<sup>(56)</sup>、神と人の師、ブツダ、世尊となって、貪をはなれ、瞋をはなれ、癡をはなれたことによって、生、老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩から解放され、苦から解放されたのだ」  
と [世尊は] おおせられた。

A [18] 「アーナンダよ、いままた、わたしにより始められたその堅固なる善なる道に依って、生という法をもつ有情たちは生の法から解放され、老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩という法をもつ有情たちは [——中略——] 悩という

51 { この一文は、直前の記述からのつながりが読み取りがたく、疑問が残る。MS }  
 は A [17] にあたる記述がない一方、「(わたしが定めた) 善なる掟は ... 涅槃に  
 導かず、梵天再生に導くのみである。いまわたしによって ... 涅槃に導く善なる  
 掟が定められた」とし、『増一48』もこれに近い。

52 Mvy. 168-170: *rāga, dveṣa, moha*。

53 Mvy. 2233-2236, 2254-2258。これに近い記述は「破僧事」にもみられる (類似の表現が Divy. 210.6-8にもある)。

*yat tu mayā atīte 'dhvani sarāgena sadveṣeṇa samohenāparimuktēna jātijarāvīyādhi-  
 maraṇaśoka-paridevaduḥkhadaurmanasyopāyāsair ... SBhV 2.18.10-12*

54 苦について説くのは A と『大天』のみ、かつ貪、瞋、癡に言及するのは A のみ。

55 以下仏の称号が続く。Mvy. 3-11参照。これに近いサンスクリット文が *Svāgatasūtra* から得られる (藤田 [1977] の指摘による)。

*aḥaṃ caitarhi śāstā loke utpannas tathāgato 'rhāṃ samyaksambuddho  
 vidyācaranaśaṃpannaḥ sugato lokavid anuttara (sic) pūruṣadamyasārathiḥ śāstā  
 devamanuṣyāṇāṃ buddho bhagavāṃ/* WALDSCHMIDT [1958: 393]

ブツダの称号に関しては藤田 [1977]、ウダガマ・スマンガラ [1985]、ENDO [1997: 167-194] 参照。藤田によれば上記のような定型表現はパーリ北伝ともに順序一定して伝えられるが、パーリでは *arahaṃ* 以下が、北伝 (漢訳およびサンスクリット阿含) では「如来」以下がひとまとまりとされるという。この *Mahādevasūtra* でも「如来」以下がひとまとまりである。

法から解放されたものとなった。わたしによって堅固なる善なる道が生まれ、歩まれたその堅固なる善なる道に依って、生という法をもつ有情たち、乃至悩という法をもつ有情たちが悩という法から解放された、というその〔道〕とは何であるか、というなら、すなわち八正道である<sup>(57)</sup>。すなわち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定であって、これがわたしによって堅固なる善なる道が生まれ、歩まれたその堅固なる善なる道に依って、生という法をもつ有情たちが、〈というところから上のごとく、〉ほかならぬその悩という法から解放されたものとなった、ということなのである。

A【19】アーナンダよ、おまえもまた同様に、そのような歩まれた堅固なる善なる道を完成させるべきであって、伝統を断絶してはならない。最後の人となるな。アーナンダよ、誰であれそのような系列にあらわれた賢明な声聞にとつて<sup>(58)</sup>、そのような歩まれた堅固なる善なる道が存続しない〔ならば、かれ〕はかれらの伝統を断つものであって、かれはかれらの最後の人となったのである。だから、わたしはおまえにこのように『おまえはそのような、系列にあら

56 *anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ* に関しては二通りの解釈がある。すなわち *anuttaraḥ* と *puruṣadamyasārathiḥ* とを一つの称号と見るものと、別々の称号と見るものとである。遠藤によればパーリ注釈文献の中ではそれぞれの解釈を支持する記述が混在している。藤田が挙げる資料の中では『大智度論』『瑜伽師地論』『成実論』が前者、『清浄道論』『法蘊足論』『大般涅槃經』が後者の解釈を示している。いまこの箇所で一号か二号かは決定しがたいが、一応上のように訳した。チベット語訳は *skyes bu 'dul ba'i kha lo sgyur ba bla na med pa* で、「無上」が後になっているのは藤田の注記にあるように全体を一つの称号と見た結果であると考えるのが自然であると思われる。ただし *Mvy.* はこの二語を分けて採録すること、またここでは *D.*、*R* が二語の間にシェーを挿入すること、には注意が必要かもしれない。

57 八正道に言及するのは有部系阿含二本と MS のみ。

58 注28で検討した「家系に生まれた」と同じ表現である。A【19】では「ブツダにはじまる師弟の系列」をあらわすとみられるので、和訳では上のように訳した。

根本説一切有部律に引用される *Mahādevasūtra*

われた賢明な声聞として、そのような堅固なる道を完成させるべきである。伝統を断絶してはならない。最後の人となるな』と告げたのだ」



略号

- AdhikV *Adhikaraṇavastu*. GNOLI [1978b].
- Aś *Avadānaśataka*. SPEYER [1906].
- BHSD Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary*. New Haven: Yale University Press. 1953. Reprint. Delhi: Motilal Banarsidass. 1977.
- CPD *A Critical Pāli Dictionary*. Copenhagen: The Royal Danish Academy. 1924.
- Divy. *Divyāvadāna*. COWELL and NEIL [1886].
- DN *Dīgha-Nikāya*. PTS.
- GBM Raghu Vira and Lokesh Chandra, *Gilgit Buddhist Manuscripts*. Śata-piṭaka series 10(6)-10(10). New Delhi: International Academy of Indian Culture. 1974.
- GM Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts* VOL. III. Part 1-4. Srinagar: Sri Satguru Publications. 1942-1950.
- J *Jātaka*. PTS.
- MA *Majjhima-Nikāya Commentary*. PTS.
- MN *Majjhima-Nikāya*. PTS.
- Monier Sir Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press. 1899.
- Mvy. *Mahāvvyutpatti*. 『梵藏漢和四譯對校：翻譯名義大集』1916. 復刻版. 京都：臨川書店. 1998.
- Negi J. S. Negi, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 1993-2005.
- SBhV *Saṅghabhedavastu*. GNOLI [1977-1978a].
- T 大正新脩大藏經. 東京：大正一切經刊行會. 1924.

参考文献

- COWELL, E. B. and NEIL, R. A.  
1886 *The Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends*. Cambridge.  
Reprint. Delhi: Indological Book House. 1987.
- ENDO, Toshiichi  
1997 *Buddha in Theravada Buddhism*. Dehiwela: Buddhist Cultural Centre.

FEER, Léon

- 1891 *Avadāna-Çataka Cent légendes bouddhiques*. XVIII of *Annales du Musée Guimet*. Paris: Leroux. Reprint. Amsterdam: Apa-Oriental Press. 1979.

GNOLI, Raniero

- 1977-1978a *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin* 1-2. XLIX 1-2 of *Serie Orientare Roma*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 1978b *The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu: Being the 15th and 16th Sections of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. L of *Serie Orientare Roma*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

MATSUMURA, Hisashi

- 1988 *The Mahāsudarśanāvadāna and The Mahāsudarśanasūtra*. Delhi: Sri Satguru Publications.

MORRIS, Richard

- 1885 “Devadūtā: Death’s Messengers.” *Journal of the Pali Text Society* 1885. pp.62-75.

PANGLUNG, Jampa Losang

- 1981 *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya: Analysiert auf Grund der Tibetischen Übersetzung*. Tokyo: The Reiyukai Library.

SPEYER, J. S.

- 1906 *Avadānaçataka a Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna*. III of *Bibliotheca Buddhica*. St.-Petersbourg: Imprimerie de l’Académie Impériale des sciences.

WALDSCHMIDT, Ernst

- 1958 “Ein zweites Daśabalasūtra.” *Mitteilungen des Instituts für Orientforschung der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin* 6. pp.382-405. Reprinted in WALDSCHMIDT [1967].
- 1967 *Von Ceylon bis Turfan: Schriften zur Geschichte, Literatur, Religion und Kunst des indischen Kulturraumes*. Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht.
- 1980 “Central Asian Sūtra Fragments and their Relation to the Chinese Āgamas.” *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*. Göttingen: Vandenhoeck&Ruprecht. pp.136-193.

赤沼智善

- 1931 『印度佛教固有名詞辭典』。東京：破塵閣書房。  
1958 『漢巴四部四阿含互照録』。東京：破塵閣書房。

入山淳子

- 1997 「Nimi Jātaka テキスト形成史研究：ヴィデーハ王による生前の天界訪問」。『東洋文化研究所紀要』133. pp.75-104。  
1998a 「Makhādevasutta と Nimijātaka：サッカのニミ王訪問」。『仏教文化研究論集』2. pp.83-104。  
1998b 「Makhādevasutta と『大天捺林経』」。『東洋文化研究所紀要』135. pp.105-145。  
2002 「Nimijātaka 第1～22詩節再考」。木村清孝博士還暦記念論集『東アジア仏教：その成立と展開』。東京：春秋社。pp.655-675。

岩井昌悟

- 2004 「[半座を分かつ] 伝承について」。『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【9】 個別研究篇I』。東京：中央学術研究所。pp.141-172。

岩本 裕

- 1962 「[アヴァダーナ=シャタカ] について」。『東洋學報』44-4. pp.94-107。

ウダガマ・スマンガラ

- 1985 「如来の十號の研究」。『大谷大学大学院研究紀要』2. pp.83-110。

佐古年穂

- 1996 「転輪王一小王」に關連して。『勝呂信靜博士古稀記念論文集』。東京：山喜房佛書林。pp.1-15。

杉本卓洲

- 1993 『菩薩：ジャータカからの探求』。京都：平樂寺書店。

田辺和子

- 1997 『パーリ聖典に見られる物語文学の世界』。東京：山喜房佛書林。

西村実則

- 2005 「千子と千仏：転輪聖王神話の一展開」。『大正大学大学院研究論集』29。

西本龍山

- 1933-1935 『國譯一切經 律部19-26』。東京：大東出版社。

干潟龍祥

- 1978 『改訂増補版 本生経類の思想史的研究・附篇：本生経類総合全表』。東

根本説一切有部律に引用される *Mahādevasūtra*

京：山喜房佛書林。

平岡聡

2002 『説話の考古学』。東京：大蔵出版。

藤田宏達

1954 「轉輪聖王について：原始佛教聖典を中心として」。宮本正尊教授還暦記念論文集『印度學佛教學論集』。東京：三省堂。pp.145-156。

1977 「仏の称号：十号論」。玉城康四郎博士還暦記念論集『佛の研究』。東京：春秋社。pp.81-98。

本庄良文

1999 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺：根品(2) [2049]-[2055]」。『神戸女子大学教育諸学研究論文集』13。pp.85-99。

前田恵學

1959 「インド佛敎文學に現われた他世界訪問譚の性格：本生經類・譬喩經類を中心にして」。『文學における彼岸表象の研究』。東京：中央公論社。pp.415-496。

松村恒

1994 「西蔵語訳律蔵における水平化の問題」。『日本西蔵学会々報』40。pp.11-17。

八尾史

2007 「根本説一切有部律における經典引用の問題：*Mahādevasūtra* の事例」。『佛敎研究』35。pp.195-215。

山崎元一

1986 『古代インド社会の研究：社会の構造と庶民・下層民』。東京：刀水書房。

1994 『古代インドの王権と宗教——王とバラモン——』。東京：刀水書房。

※本稿は平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の成果の一部である。

### Mahādevasūtra

A [1] དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལུས་འཕགས་ཀྱི་ལྗོངས་རྒྱ་<sup>D53a</sup>ཞིང་གཤེགས་པ་ན།<sup>1)</sup> མི་ཐི་<sup>2)</sup>ལར་  
 ཕྱོག་ནས། མི་ཐི་ལའི་ལྷ་<sup>T184b</sup>ཆེན་པོའི་<sup>3)</sup>ཨ་མའི་ཚལ་ན་བཞུགས་སོ<sup>4)</sup>། དེ་ནས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱིས་  
 ས་ཕྱོགས་གཞན་ཞིག་ཏུ་འཇུག་<sup>5)</sup>པ་མཇུག་དོ<sup>6)</sup>། །<sup>7)</sup> ཚོང་དང་ལྡན་པ་<sup>8)</sup>ཀྱང་དགའ་བོས་བཅོམ་ལྡན་འདས་  
 འཇུག་<sup>9)</sup>པ་<sup>10)</sup>མཇུག་པ་མཇུག་དོ<sup>11)</sup>། ། མཇུག་ནས་ཀྱང་<sup>12)</sup>བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་འདི་སྐད་ཅེས་གསལ་  
 ཏོ། ། བཅུན་པ་<sup>13)</sup>དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་<sup>14)</sup>སངས་རྒྱས་རྣམས་ནི་རྒྱ་  
 མ་མཆིས་<sup>15)</sup>N138bརྒྱུན་མ་མཆིས་པར་འཇུག་<sup>16)</sup>པ་<sup>17)</sup>མི་མཇུག་ན།<sup>18)</sup> བཅུན་པ་<sup>19)</sup>འཇུག་<sup>20)</sup>པ་མཇུག་པ་  
 དེའི་རྒྱ་གང་ལགས་<sup>21)</sup>R56aརྒྱུན་<sup>P49a</sup>གང་ལགས། ཀྱང་དགའ་བོ་དེ་དེ་བཞིན་ནོ། དེ་དེ་བཞིན་ཏེ། དེ་  
 བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་སངས་རྒྱས་རྣམས་ནི་རྒྱ་མེད་<sup>22)</sup>རྒྱུན་མེད་པར་འཇུག་  
 པ་<sup>23)</sup>མི་<sup>24)</sup>མཇུག་དོ<sup>25)</sup>། །<sup>26)</sup>

<sup>30b6</sup> 爾時世尊。於勝身城。人間遊行。至彌替羅。住莫訶提婆林中。廣如莫訶提婆。及國王相應品中說。

- 1) DP omit | 2) T ཐིལ་ 3) N པོ་ 4) T བཞུགསོ་ 5) P མཇུག་ 6) T མཇུག་ 7) N |
- 8) T བ་ 9) P མཇུག་ 10) T བ་ 11) T མཇུག་ 12) NT insert | 13) T བ་ 14) N omits པའི་
- 15) R inserts | 16) P མཇུག་ 17) N བ་ 18) DP omit | 19) DP insert བཅོམ་ལྡན་འདས་
- 20) P ཇུག་ 21) R inserts | 22) R inserts | 23) T བ་ 24) N མ་ 25) T མཇུག་ 26) N |

A [2] ཀྱང་དགའ་བོ་<sup>1)</sup>ཐོན་བྱུང་བ་མི་རྣམས་ཀྱི་ཚོལ་བརྒྱུད་ཁྱི་བྱུང་བར་བྱུར་ཏེ། མི་ཚོལ་བརྒྱུད་ཁྱི་  
 པ་<sup>2)</sup>རྣམས་ཀྱི་འཇོམ་བུ་<sup>3)</sup>གྲིང་འདི་འཕྱོར་བ་<sup>4)</sup>དང་། རྒྱས་པ་དང་། བདེ་བ་དང་། ལོ་ལེགས་པ་དང་། རྒྱུ་  
 བོ་<sup>5)</sup>དང་མི་མང་པོས་<sup>6)</sup>གང་བ་<sup>7)</sup>།<sup>8)</sup> གྲོང་དང་། གྲོང་རྒྱལ་དང་། ལུལ་འཁོར་དང་། རྒྱལ་པོའི་ཕོ་བྲང་གི་  
 བར་བྱ་གསལ་གི་འཕུར་རྟུལ་ཀྱིས་ཚོང་པ་<sup>9)</sup>བྱུང་བར་བྱུར་ཏེ། མི་ཚོལ་བརྒྱུད་ཁྱི་པ་རྣམས་ལ།<sup>10)</sup> ལུས་ཀྱི་  
 གཞོན་པ་ནི་འདི་ལྷ་བྱུངས་འབྱུང་སྟེ། འདི་ལྷ་སྟེ།<sup>11)</sup> གྲང་བ་<sup>12)</sup>དང་། ཚ་བ་དང་། བཀྲེས་པ་<sup>13)</sup>དང་།  
 རྫོམ་པ་<sup>14)</sup>དང་། འདོད་<sup>15)</sup>པ་དང་། ལི་ག་འཇུག་<sup>16)</sup>པ་དང་། རྩ་བ་ཡིན་ནོ། མི་ཚོལ་བརྒྱུད་ཁྱི་པ་<sup>17)</sup>  
 རྣམས་ཀྱི་བུ་མོ་ནི་བཅོམ་<sup>18)</sup>ནས་ལོ་ལྷ་བརྒྱ་ལོན་པ་དང་།<sup>19)</sup> ལྷོ་ལ་གཏོང་བར་བྱེད་དེ། དཔེར་ན་ད་ལྷར་ཀྱི་  
 ལོ་བཅོ་<sup>20)</sup>ལྷའམ་<sup>21)</sup>།<sup>22)</sup> ལོ་བཅུ་རྩལ་ལོན་པ་<sup>23)</sup>བཞིན་ནོ། །

- 1) T དགའོ་ 2) P བ་, T དང་ for བ་ 3) DNP བུའི་ 4) DNR བ་ 5) N པོ་ 6) R གང་པོས་
- 7) T བ་ 8) NT omit | 9) NT ཚོས་པར་, P མཚོང་པ་, R མཚོང་པར་ 10) DP omit |
- 11) DP omit | 12) T བ་ 13) P བ་ 14) N བ་ 15) D འདོད་ 16) NP རྒྱས་ 17) P བ་
- 18) T བཅོམ་ 19) D omits | 20) D བཅོ་. P བཅོ་ 21) NPRT ལ་ལམ་ 22) DP omit |

A [3] ཀུན་དགའ་པོ་<sup>1)</sup>མི་རྣམས་ཀྱི་ཚེ་ལོ་བརྒྱད་ཁྱིམ་བ་ན།<sup>2)</sup> འཁོར་ལོས་<sup>3)</sup>སྐྱར་བའི་རྒྱལ་<sup>N139a</sup>པོ་  
 ལྷ་<sup>4)</sup>ཚེན་པོ་<sup>T185a</sup>ཞེས་བྱ་བ་མཐའ་བཞིར་རྣམ་པར་རྒྱལ་བ།<sup>5)</sup> ཚེས་དང་ལྷན་པ་<sup>6)</sup>།<sup>7)</sup> ཚེས་ཀྱི་རྒྱལ་<sup>8)</sup>པོ་  
 རིན་པོ་ཚེ་སྐྱ་བརྟན་དང་ལྷན་པ་<sup>9)</sup>ཞིག་<sup>10)</sup>བྱུང་འོ་<sup>11)</sup>། དེའི་རིན་པོ་ཚེ་<sup>12)</sup>སྐྱ་བརྟན་ནི་འདི་ལྷ་བྱ་དག་<sup>13)</sup>  
 བྱང་སྟེ། འདི་ལྷ་སྟེ། འཁོར་ལོ་རིན་པོ་ཚེ་དང་། སྤང་<sup>R56b</sup>པོ་<sup>14)</sup>རིན་པོ་<sup>15)</sup>ཚེ་དང་། རྩ་རིན་པོ་ཚེ་  
 དང་། རྩར་བྱ་རིན་པོ་ཚེ་<sup>16)</sup>དང་། བྱད་མེད་རིན་པོ་ཚེ་དང་།<sup>17)</sup> བྱིས་བདག་རིན་པོ་ཚེ་དང་། བརྟན་  
 པ་<sup>18)</sup>ནི་བློན་པོ་རིན་པོ་ཚེ་ཉིད་ཡིན་<sup>D53b</sup>མོ། དེ་ལ་ཡང་བྱ་དཔལ་བ།<sup>19)</sup> རྒྱལ་<sup>20)</sup>པོ་དང་<sup>21)</sup>།<sup>22)</sup> ཡན་  
 ལག་མཚོགས་གི་གསུགས་དང་ལྷན་པ་<sup>23)</sup>།<sup>24)</sup> ས་འོལ་གྱི་<sup>25)</sup>སྟེ་རབ་དུ་<sup>26)</sup>འཛོམས་པ་སྟོང་ཡང་ཚང་བར་བྱུང་  
 སྟེ། དེ་རྒྱ་<sup>27)</sup>མཚོ་ལ་གུག་<sup>28)</sup>པའི་ས་<sup>29)</sup>ཚེན་པོ་མ་ལུས་པ་གཞོད་པར་<sup>30)</sup>སྟོ་བ་མེད་ཅིང་འཚོ་བ་མེད་པ་<sup>31)</sup>  
 འདི་ཉིད་ཚང་པ་མེད་ཅིང་<sup>32)</sup>མཚོན་གྱིས་བདའ་བ་<sup>33)</sup>མེད་ལ། ཚེས་དང་མཐུན་<sup>34)</sup>ཞིང་<sup>35)</sup>སྟོམས་པར་<sup>36)</sup>  
 ལེགས་པར་<sup>37)</sup>ཕབ་སྟེ་གནས་སོ། །

- 1) T དགའོ 2) DP omit |, N | | 3) N ལོ 4) N omits ལྷ་ 5) DNPT omit | 6) T བ  
 7) DNPT omit | 8) T རྣམ་ 9) T བ་ 10) N omits ཞིག་, T དག་ 11) N འབྱུང་(omits  
 འོ་) 12) T omits ཚེ་ 13) NRT omit དག་ 14) P པོ་ 15) P པོ་ 16) T omits ཚེ་  
 17) N omits བྱད་མེད་རིན་པོ་ཚེ་དང་། 18) T བ་ 19) NT དཔའོ, omit | 20) NT བརྟན་པ་  
 21) P བ་ 22) NT omit | 23) T བ་ 24) NT omit | 25) P ཀྱི་ 26) N ཏུ་ 27) T རྒྱལ་  
 28) T གསུགས་ 29) T omits ས་ 30) P inserts བ་ 31) NT insert | 32) NT insert |  
 33) DP བ་ 34) NPT འཐུན་ 35) T ཅིང་ 36) DP བས་ 37) N omits ལེགས་པར་

A [4] དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་སྐྱ་དང་ཁ་སྐྱ་འདྲེག་<sup>1)</sup>མཁའ་གྱི་<sup>2)</sup>མིས་<sup>3)</sup>འཚོས་<sup>4)</sup>པ་ན།<sup>5)</sup> འདྲེག་<sup>6)</sup>  
 མཁའ་གྱི་མི་ལ་སྐྱས་པ་<sup>7)</sup>། གྱེ་ནང་ཇེ་འདི་དབུ་<sup>8)</sup>ལ་སྐྱ་དཀར་པོ་སྐྱེས་པ་ཁྱོད་ཀྱིས་མཐོང་དང་ལྷའི་པོ་ཉ་བྱུང་བ་  
 ཡིན་གྱིས།<sup>9)</sup> དེའི་ཚོང་འདི་<sup>10)</sup>སྐྱ་དུ་གསོལ་ཅིག །ལྷ་བཀའ་བཞེན་འཚོལ་ཞེས་འདྲེག་<sup>11)</sup>མཁའ་གྱི་མིས།<sup>12)</sup>  
 རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་ལྷར་<sup>P49b</sup>མཉན་ཏོ། །

- 1) DP འདྲེག་ 2) T ཀྱིས་ 3) D inserts སྐྱ་དང་ཁ་སྐྱ་, P inserts སྐྱ་དང་ཁ་སྐྱ་ལ་ 4) P ཚོས་  
 5) DP omit | 6) DP འདྲེག་ 7) P བ་ 8) P དབུ་ 9) DNP omit | 10) NPR དེའི་  
 11) DP འདྲེག་ 12) DP omit |

A [5] དུས་གཞན་ཞིག་ན་འདྲེག་<sup>1)</sup>མཁའ་གྱིས་<sup>2)</sup>རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་<sup>3)</sup>སྐྱ་དང་<sup>4)</sup>ཁ་སྐྱ་འཚོས་པ་ན།<sup>5)</sup>  
 རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་མགོ་ལ་སྐྱ་དཀར་པོ་སྐྱེས་པས་<sup>6)</sup>ལྷའི་པོ་ཉ་བྱུང་བར་མཐོང་འོ་། མཐོང་ནས་ཀྱང་  
 རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་<sup>7)</sup>ལ་འདི་སྐད་ཅེས་སྐྱས་སོ་<sup>8)</sup>། ། ལྷ་མཁའ་དུ་གསོལ་ལ། ཁྱེད་<sup>10)</sup>ཀྱི་དབུ་ལ་  
 དབུ་<sup>11)</sup>སྐྱ་དཀར་པོ་སྐྱེས་པས་ལྷའི་པོ་ཉ་བྱུང་ལགས་སོ་<sup>12)</sup>། དེས་སྐྱས་པ།<sup>13)</sup> གྱེ་ནང་ཇེ་ཁྱོད་ཀྱིས་<sup>14)</sup>སྐྱ་  
 དཀར་པོ་དེ་དག་མི་འདྲེག་<sup>15)</sup>པར་དལ་བྱ་དལ་བྱས་ལྷུང་ལ་འདི་ལག་དུ་བྱིན་<sup>T185b</sup>ཅིག །ལྷ་བཀའ་བཞེན་

B-1 [2] ལྷུ་པོ་ཚེན་པོ་སྒྲོན་བྱུང་བ་ཡུལ་མི་<sup>1)</sup> ཐི་ལར་<sup>2)</sup> ལྷུ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་ཞེས་བྱ་བ་འཁོར་ལོས་<sup>3)</sup>  
སྐྱར་བའི་ལྷུ་པོ་མཐའ་བཞིར་རྣམ་པར་ལྷུ་བ།<sup>4)</sup> ཚོས་དང་ལུན་པ་<sup>5)</sup> | <sup>6)</sup> ཚོས་ཀྱི་ལྷུ་པོ་<sup>7)</sup> རིན་པོ་ཆེ་སྐྱ་  
བདུན་དང་ལུན་པ་<sup>8)</sup> ཞིག་བྱུང་སྟེ། དེའི་རིན་པོ་ཆེ་སྐྱ་བདུན་ཅི་འདི་ལྷ་བྱ་དག་ཡིན་ཏེ། འདི་ལྷ་སྟེ། འཁོར་ལོ་  
རིན་པོ་ཆེ་དང་། སྐྱང་པོ་རིན་པོ་ཆེ་<sup>9)</sup> དང་། རྟ་རིན་པོ་ཆེ་དང་། རོར་བུ་རིན་པོ་ཆེ་དང་། བྱང་མེད་རིན་པོ་  
ཆེ་དང་། ཁྱིམ་བདག་རིན་པོ་ཆེ་དང་། བདུན་པ་<sup>10)</sup> \*སྒྲོན་པོ་རིན་པོ་<sup>N369b</sup> ཆེ་ལོ། དེ་ལ་\*བྱ་དཔའ་བ།<sup>11)</sup>  
རྒྱལ་པོད་པ།<sup>12)</sup> ཡན་ལག་མཚོག་གི་གཟུགས་དང་ལུན་པ་<sup>13)</sup> | ཕ་རོལ་གྱི་སྟེ་རབ་དུ་འཛོམས་<sup>14)</sup> པ་སྟོང་ཡང་  
ཆང་བར་ཡོད་ཅིང་། དེ་ལྟ་མཚོ་ལ་ཐུག་པའི་ས་ཚེན་པོ་མ་ལུས་པར་གཞོད་པར་སྟོ་བ་མེད་ཅིང་<sup>15)</sup> འཚོ་བ་མེད་  
པ་<sup>16)</sup> འདི་ཉིད་ཆང་པ་མེད་ཅིང་<sup>17)</sup> མཚོན་གྱིས་<sup>18)</sup> བདའ་<sup>19)</sup> བ་མེད་ལ།<sup>20)</sup> ཚོས་དང་མཐུན་ཞིང་<sup>21)</sup> སྟོམས་  
པས་ལེགས་པར་ཕབ་སྟེ་གནས་<sup>R263a</sup> སོ<sup>22)</sup> | |

bhūtapūrvam mahārāja mithilāyām mahādevo nāma rājābhūc cakravartī/  
vistareṇa mahādevasūtram madhyamāgame rājasamṣyuktakanipāte/

58b29 乃往古昔。彌地羅國。有轉輪王名爲大天。我於中阿笈摩。已廣說訖。

1) R མ་ 2) NT insert | 3) N ལོ་ 4) DP omit | 5) T བ་ 6) DP omit | 7) NT insert |, R | | 8) T བ་ 9) N ཚ་ 10) T བ་ 11) DP omit | 12) T omits | 13) T བ་ 14) D འཛོམས་ 15) NT insert | 16) NT insert | 17) NT insert | 18) T ཀྱི་ 19) NRT འདའ་ 20) DP omit | 21) NT འཐུན་པ་, P འཐུན་ཞིང་, R མཐུན་པའི་ 22) NT གནསོ་, P གནས་ས་

B-1 [3] དེ་ནས་ལྷུ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་སྐྱ་མཁན་གྱི་མི་<sup>1)</sup> སྐྱ་དང་ཁ་སྐྱ་འཚོས་པ་ཀ།<sup>2)</sup> སྐྱ་མཁན་གྱི་མི་ལ་  
སྐྱས་པ།<sup>3)</sup> ཀྱེ་ཀང་རྗེ་ཞུང་གིས་གང་གི་ཚེ་<sup>4)</sup> <sup>P183b</sup> ངའི་མགོ་ལས་གཤིན་རྗེའི་པོ་ཉ་སྐྱ་དཀར་སྐྱེས་པ་མཐོང་བ་<sup>5)</sup>  
དེའི་ཚོང་ལ་སྒྲོན་<sup>6)</sup> ཅིག། ལྷ་བཀའ་བཞིན་འཚལ་ཞེས་<sup>T383a</sup> སྐྱ་མཁན་གྱི་<sup>7)</sup> མིས་ལྷུ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་ལྷ་ར་  
མཉན་ཏེ་<sup>8)</sup> | |

1) P omits སྐྱ་མཁན་གྱི་མི་ 2) DP omit | 3) D | | 4) NT omit ཚེ་ 5) NT omit མཐོང་བ་ 6) P སྒྲོན་, NT སྒྲོན་ 7) T ཀྱིས་ 8) P ཏེ་

B-1[4] དུས་གཞན་ཞིག་ན་སྐྱ་མཁན་གྱི་<sup>1)</sup> མིས་ལྷུ་པོ་<sup>2)</sup> ལྷ་ཚེན་པོའི་སྐྱ་དང་<sup>3)</sup> ཁ་སྐྱ་འཚོས་པ་ཀ།<sup>4)</sup> ལྷུ་  
པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་<sup>5)</sup> མགོ་ལས་<sup>6)</sup> གཤིན་རྗེའི་པོ་ཉ་<sup>7)</sup> སྐྱ་དཀར་སྐྱེས་པ་མཐོང་ངོ་<sup>8)</sup> | | མཐོང་ནས་ཀྱང་ཡང་ལྷུ་  
པོ་<sup>9)</sup> ལྷ་ཚེན་པོ་<sup>10)</sup> ལ་འདི་སྐད་ཅེས་སྐྱས་སོ<sup>11)</sup> | | ལྷ་མཁན་པར་མཐོང་ཅིག། \*དབུ་ལ་གཤིན་རྗེའི་པོ་ཉ་དབུ་  
སྐྱ་དཀར་པོ་སྐྱེས་ལགས་སོ<sup>12)</sup> | | \*ཀྱེ་ཀང་རྗེ་དའི་ཕྱིར་ཞུང་གིས་སྐྱ་དཀར་\*དེ་དག་རིམ་གྱིས་<sup>13)</sup> དལ་བུ་<sup>14)</sup>

འཚལ་ཞེས་<sup>R57a</sup>འདྲེག་<sup>16)</sup>མཁམ་གྱིས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་ལྷར་མཉམ་ནས།<sup>17)</sup> སྐྱ་དཀར་པོ་དེ་གསེར་གྱི་  
སྐང་<sup>18)</sup>ཚེར་<sup>19)</sup>གྱིས་<sup>20)</sup>མི་འདྲེག་<sup>21)</sup>པར་<sup>22)</sup>དལ་གྱིས་<sup>23)</sup>ལྷུང་ནས།<sup>24)</sup> རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་ལག་པར་  
བཞག་<sup>25)</sup>གོ།<sup>26)</sup> དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོས་སྐྱ་དཀར་པོ་དེ་ལག་པ་གཉིས་གྱིས་<sup>27)</sup>དྲངས་ནས་ཚོགས་སུ་<sup>28)</sup>  
བཅད་དེ་སྦྲས་པ་<sup>29)</sup>།

ད་<sup>30)</sup>ནི་བདག་གི་མགོ་བོ་ལ།<sup>31)</sup>

ན་ཚོད་འཛོམས་པའི་<sup>32)</sup>སྐྱ་སྦྱེས་ཏེ།<sup>33)</sup>

ལྷ་ཡི་<sup>34)</sup>པོ་ཉ་བྱུང་བུར་བས་<sup>35)</sup>།།

བདག་གི་རབ་བྱུང་དུས་ལ་བབ། །

- 1) DP འདྲེག་, T འདྲེགས་ 2) T གྱི་ 3) P བའི་ 4) NT insert | 5) DP omit | 6) P བས་ 7) P པོ་ 8) N སྦྲསོ་ 9) T ཚེན་པོར་ for མཁམ་པར་ 10) DP རྒྱུད་ 11) N omits དབུ་
- 12) NT ལགསོ་ 13) N omits | 14) T གྱི་ 15) D རྟེག་, NT འདྲེག་, P དྲེག་ 16) DP འདྲེག་, T འདྲེགས་ 17) DP omit | 18) P སྐང་ 19) N ཚེར་ 20) R གྱི་ 21) DNPT དྲག་
- 22) P བར་ 23) DP repeat དལ་གྱིས་ 24) DP omit | 25) T གཞུག་ 26) NPRT | 27) P གྱིས་ 28) NPT ཚོགས་ 29) P བ་ 30) P ང་ 31) P | 32) P བའི་ 33) P | 34) P ལྷའི་ 35) DNTR བས་

A [6] བདག་གིས་མི་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པ་ནི་སྤྱད་ཟེན་གྱིས་<sup>1)</sup>།<sup>2)</sup> བདག་གིས་ལྷའི་འདོད་པ་དག་བཅའ་  
བའི་དུས་ལ་བབ་གྱིས། མ་ལ་བདག་<sup>3)</sup>གིས་<sup>4)</sup>གཞིན་ཅུ་ལྷ་པོ་རྒྱལ་སྲིད་ཀྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བཅུག་  
ལ།<sup>5)</sup> རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྲོང་གི་ཚངས་པར་སྦྱོད་པ་<sup>6)</sup>སྤྱད་དོ་<sup>7)</sup>སྐྱམ་ནས། དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོས་གཞིན་  
ཅུ་པོ་ཉམས་བཀུག་ནས་འདི་སྐད་ཅེས་སྦྲས་སོ་<sup>8)</sup>།། འཇུག་ཅུ་ཤེས་པར་གྱིས་ཤིག །<sup>D54a</sup> ངའི་མགོ་ལ་  
སྐྱ་དཀར་པོ་སྦྲས་པས་<sup>9)</sup>།<sup>10)</sup> ལྷའི་པོ་ཉ་བྱུང་བར་བུར་ཏེ།<sup>11)</sup> ངས་མི་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པ་ནི་<sup>12)</sup>སྤྱད་ཟེན་  
པས།<sup>13)</sup>N140a ངས་<sup>14)</sup>ལྷའི་འདོད་པ་དག་བཅའ་བའི་དུས་ལ་བབ་སྟེ། ངས་བུ་གཞིན་ཅུ་ལྱོད་ལ་རྒྱ་མཚོའི་  
མཐས་ཀླུ་པའི་ས་ཚེན་པོ་འདི་གཏད་<sup>15)</sup>གྱིས།<sup>16)</sup> དེ་ལྟོད་ཀྱིས་ཚོས་བཞིན་གྱིས་<sup>17)</sup>རྗེས་སུ་<sup>18)</sup>བསྐྱང་<sup>19)</sup>བར་  
བྱའི་<sup>20)</sup>ཚོས་མ་ཡིན་པས་<sup>21)</sup>ནི་མ་ཡིན་ནོ། ། འགའ་<sup>22)</sup>ཞིག་ཚོས་མ་ཡིན་པ་<sup>23)</sup>སྦྱོད་དམ།<sup>24)</sup> འདྲེན་  
མར་སྦྱོད་ན།<sup>25)</sup> ལྟོད་ཀྱིས་ཡལ་འཁོར་དུ་གནས་སུ་<sup>26)</sup>མ་གཞུག་ཅིག་<sup>27)</sup>། འཇུག་ཅུ་གང་གི་ཚོ་ལྟོད་<sup>28)</sup>  
ཀྱང་མགོ་ལ་<sup>R57b</sup>སྐྱ་དཀར་པོ་སྦྲས་པ་<sup>29)</sup>མཚོང་བ་<sup>30)</sup>དང་།<sup>31)</sup> ལྷའི་པོ་ཉ་འོངས་པ་ཡིན་གྱིས།<sup>32)</sup> དེའི་ཚོ་  
ལྟོད་ཀྱིས་ཀྱང་གཞིན་ཅུ་ལྷ་པོ་<sup>33)</sup>རྒྱལ་སྲིད་ཀྱི་དབང་ལྷག་ལ་<sup>34)</sup>དབང་བྱེད་དུ་ཆུག་ལ།<sup>35)</sup> རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྲོང་  
གི་<sup>36)</sup>ཚངས་པར་སྤྱད་པ་སྦྱོད་ཅིག།<sup>T186a</sup> འདི་ལྷར་<sup>37)</sup>བུ་གཞིན་ཅུ་ལྟོད་ཀྱིས་<sup>38)</sup>དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་<sup>39)</sup>  
སྟོལ་<sup>P50a</sup>དོད་པ་དེ་ལྷ་སྲིད་རྗེས་བསམ་<sup>40)</sup>པར་བྱའི་<sup>41)</sup> ལྷུན་ཆད་པར་མ་བྱེད་ཅིག །སྦྲས་བུ་ཐ་གཤུ་ལྷུར་



དལ་བུས་ལྷང་ལ་<sup>15)</sup>ངའི་ལག་པར་བྱིན་ཅིག །ལྷ་བཀའ་བཞིན་འཚལ་ཞེས་སྐྱམ་མཚན་གྱི་<sup>16)</sup>མིས་རྒྱལ་པོ་  
ལྷ་ཚེན་པོའི་ལྷར་མཉམ་ནས།<sup>17)</sup> སྐྱ་སྐྱ་<sup>N370a</sup>པོ་དེ་དག་གསེར་གྱི་སྤང་<sup>18)</sup>ཅོར་གྱིས་<sup>19)</sup>རིམ་གྱིས་<sup>20)</sup>དལ་  
བུ་<sup>21)</sup>དལ་བུས་ལྷང་ནས།<sup>22)</sup> རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོའི་ལག་ཏུ་བཞག་གོ་<sup>23)</sup>། །<sup>24)</sup> དེ་ནས་<sup>D195a</sup>རྒྱལ་པོ་<sup>25)</sup>ལྷ་  
ཚེན་པོས་སྐྱ་སྐྱ་པོ་དེ་<sup>26)</sup>དག་ལག་པ་གཉིས་ཀྱིས་བརྒྱང་ནས།<sup>27)</sup> ཚིགས་སུ་<sup>28)</sup>བཅད་དེ་<sup>29)</sup>སྐྱས་པ།

བདག་གི་མགོ་ལས་<sup>30)</sup>ཀླད་<sup>31)</sup>ཀྱི་སྤྲ། །<sup>32)</sup>  
ལང་ཚོ་<sup>33)</sup>འཕྲོག་པ་<sup>34)</sup>སྐྱེས་པ་ན་<sup>35)</sup>། །<sup>36)</sup>  
གཤིན་ཇི་དེ་པོ་ཉ་བྱང་ལྷར་གྱིས་<sup>37)</sup>། །<sup>38)</sup>  
བདག་ནི་རབ་འབྱུང་དུས་ལ་བབ། །

- 1) PT ཀྱིས་ 2) R བོ་ 3) NT insert ། 4) DP omit ། 5) N བོ་ 6) NT insert །
- 7) NRT ཉའི་ 8) N མཐོང་ 9) R བོ་, N inserts ཚེན་པོ་ 10) PR བོ་ 11) N སྐྱལ་ 12) N  
ལགསོ་ 13) P ཀྱི་ 14) DP བུས་ 15) NT insert ། 16) P ཀྱིས་ 17) DP omit ། 18) T  
སྤང་ 19) N omits ཀྱིས་ 20) T ཀྱི་ 21) DP བུས་ 22) DP omit ། 23) N བཞགོ་
- 24) NPRT ། 25) R བོས་ 26) P ད་ 27) DP omit ། 28) N ཚིགས་སུ་, P ཚགས་སུ་ 29) N  
བཅད་ 30) NT ལ་ 31) T ཀླད་ 32) P ། 33) P ཚོ་, R འཚོ་ 34) DP བ་ 35) DPR ནི་
- 36) P ། 37) T ཀྱིས་ 38) P །

B-1 [5] བདག་གིས་མི་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པ་ནི་སྤྱད་ཟེན་ཏེ།<sup>1)</sup> \*ལྷ་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པ་\*བཅའ་བའི་དུས་  
ལ་བབ་ཀྱིས་<sup>2)</sup>། <sup>R263b</sup>མ་ལ་བདག་གིས་གཞིན་ཅུ་བྱ་བོ་རྒྱལ་སྤིང་གྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བརྟུག་ལ།<sup>3)</sup>  
རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྲོང་གི་ཚངས་པར་སྤོད་པ་སྤྱད་<sup>4)</sup>དོ་<sup>5)</sup>སྐྱམ་མོ་<sup>6)</sup>། །<sup>7)</sup> དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོས་གཞིན་ཅུ་བྱ་  
བོ་ཤོས་པོ་ཉ་ས་<sup>8)</sup>བཀའ་<sup>9)</sup>ནས་འདི་སྤང་ཅེས་སྐྱས་སོ་<sup>10)</sup>། །<sup>11)</sup> \*གཞིན་ཅུ་ཤེས་<sup>12)</sup>པར་གྱིས་ཤིག།<sup>13)</sup> ངའི་  
མགོ་ལས་གཤིན་ཇི་དེ་པོ་ཉ་སྤྲ་དཀར་སྐྱེས་ཏེ། ངས་མི་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པ་ནི་སྤྱད་ཟེན་པས་<sup>14)</sup>།<sup>15)</sup> \*ལྷ་  
རྣམས་ཀྱི་འདོད་<sup>16)</sup>པ་\*བཅའ་<sup>T383b</sup>བའི་དུས་ལ་བབ་སྟེ། བུ་གཞིན་ཅུ་ཁྱེད་ལ་ངས་རྒྱ་མཚོ་ལ་བྱག་པའི་ས་  
ཚེན་པོ་འདི་གཏད་ཀྱིས། ཁྱོད་ཀྱིས་འདི་ལ་ཚོས་བཞིན་གྱིས་\*བསྐྱང་བར་<sup>17)</sup>བྱའི།<sup>18)</sup> ཚོས་མ་ཡིན་པས་<sup>19)</sup>  
ནི་མ་ཡིན་ནོ། །འགའ་ཞིག་ཚོས་མ་<sup>20)</sup>ཡིན་པ་<sup>21)</sup>སྤོད་<sup>22)</sup>དམ་<sup>23)</sup>འབྲེན་མར་<sup>24)</sup>སྤོད་ན།<sup>25)</sup> ཁྱོད་ཀྱིས་<sup>26)</sup>  
ཡུལ་དུ་གནས་སུ་<sup>27)</sup>མ་གཞུག་ཅིག་<sup>28)</sup>། བུ་གཞིན་ཅུ་ཁྱོད་<sup>N370b</sup>ཀྱིས་ཀྱང་གང་གི་<sup>29)</sup>ཚོ་མགོ་ལ་གཤིན་  
<sup>P184a</sup>ཇི་དེ་པོ་ཉ་སྤྲ་དཀར་སྐྱེས་པར་མཐོང་བ་དེའི་ཚོ་<sup>30)</sup>ཁྱོད་ཀྱིས་ཀྱང་གཞིན་ཅུ་བྱ་བོ་ཤོས་རྒྱལ་<sup>31)</sup>སྤིང་  
གྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་རྟུག་ལ།<sup>32)</sup> རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྲོང་གི་<sup>33)</sup>ཚངས་པར་སྤོད་པ་སྤོད་  
ཅིག །\*ཅི་ནས་ཀྱང་ཁྱོད་ཀྱིས་དགེ་བའི་ལམ་ངེས་པ་<sup>34)</sup>འདི་ལྷ་བུ་ལ་<sup>35)</sup>ཞུགས་པའི་<sup>36)</sup>ཇིས་སུ་<sup>37)</sup>འཇུག་པར་

དུ་གྲུར་ཏ་རྩེ། བུ་གཞོན་ལུ་འགའ་ཞིག་འདི་ལྟ་བུའི་སྐྱེས་བུ་བཟང་པོ་<sup>42)</sup>རྒྱུད་དུ་<sup>43)</sup>བྱུང་བའི་དགེ་བའི་ལམ་  
 ཇེས་<sup>44)</sup>པ་སྲོལ་<sup>45)</sup>དོད་པ་དེ་ལྟ་བུའི་རྗེས་<sup>46)</sup>མི་འཛོལ་<sup>47)</sup>གང་ཡིན་པ་དེ།<sup>48)</sup> དེ་རྣམས་<sup>49)</sup>ཀྱི་རྒྱུན་གཙོད་པ་  
 ཡིན་ཞིང་།<sup>50)</sup> དེ་དེ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱུད་ལ་སྐྱེས་བུ་སྐྱེས་བུ་གལ་ཏུ་གྲུར་པ་ཡིན་ནོ། ། དེ་ལྟར་ལྷན་དུ་འདྲི་སྐྱད་  
 ཅེས།<sup>51)</sup> གང་གི་<sup>52)</sup>ཚོ་སྐྱོད་ཀྱིས་འདི་ལྟ་བུའི་སྐྱེས་བུ་བཟང་པོ་<sup>53)</sup>རྒྱུད་དུ་<sup>54)</sup>བྱུང་བའི་དགེ་བའི་ལམ་ཇེས་  
 པ་<sup>55)</sup>སྲོལ་དོད་པ་དེ་<sup>56)</sup>ལྟ་<sup>57)</sup>བུའི་རྗེས་<sup>58)</sup>སོབས་ལ་རྒྱུན་ཚད་པར་<sup>N140b</sup>མ་བྱེད་ཅིག །སྐྱེས་བུ་སྐྱེས་བུ་  
 གྲུར་བར་<sup>59)</sup>མ་བྱེད་ཅིག ཅེས་སྤྲོད། །

- 1) T ཀྱིས་ 2) DP omit | 3) P བ་དག་ 4) R གི་ 5) DNP omit | 6) D omits ལྷོད་པ་
- 7) N inserts | | 8) N སྐྱོལ་ 9) P བས་ 10) DNPT omit | 11) DP ཏེ། 12) NRT omit
- འི་ 13) DP omit | 14) P ང་སྐྱེ།, RT ངའི་ 15) N བཏང་ 16) DNPT omit | 17) T ཀྱི་
- 18) NT རྗེས་ 19) N ལྱུང་ 20) DNPT omit | 21) T བས་ 22) R འབའ་ 23) T བ་
- 24) DNPT omit | 25) DP omit | 26) NT གཞན་སྐྱེ་ 27) DPT ཞིག་ 28) NT རྐྱེད་
- 29) T repeats བ་ 30) P omits བ་ 31) DP omit | 32) NT omit | 33) N inserts | |,
- T | 34) N omits ལ་ 35) DNPT omit | 36) N གིས་ 37) NT ལྟ་ 38) D ཀྱི་ 39) P
- དེས་ (omits བ་) 40) N བསམ་ 41) DP omit |, NT རྐྱེད། | 42) P བོ་ 43) N རྒྱུན་དུ་
- 44) P ཇེས་ 45) P སྲོལ་ 46) P རྗེས་ 47) DR འཛོལ་པ་ 48) DP omit | 49) P རྣ་མས་
- 50) DNPT omit | 51) NT omit | 52) P omits གི་ 53) P བོ་ 54) N རྒྱུན་དུ་, R omits
- དུ་ 55) P དས་པ་ 56) P ཏ་ 57) N omits ལྟ་ 58) P རྗེས་, T རྗེས་ 59) DNPT བར་

A [7] དེ་རྣམས་རྒྱལ་པོ་ལྟ་ཆེན་པོས་གཞོན་ལུ་སྐྱེས་པའི་སྐྱེད་ཀྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བརྟུག་ནས།<sup>1)</sup>  
 མི་ཐེ་ལའི་ལྟ་ཆེན་པོའི་ཨ་སྐྱེད་ཀྱི་རྒྱལ་པོའི་<sup>2)</sup>ཆལ་དེ་ཉིད་དུ་རྒྱལ་པོའི་<sup>3)</sup>དབང་སྲོང་གི་ཆངས་པར་<sup>4)</sup>སྤྲོད་པ་སྤྲོད་<sup>5)</sup>དོ། །

- 1) DNPT omit | 2) P ལྱིད་ 3) NT པོ་ 4) P བར་ 5) T ལྷོད་

A [8] ཀུན་དགའ་པོ་རྒྱལ་པོ་ལྟ་ཆེན་པོས་གཞོན་ལུ་སྐྱེས་པའི་གང་ཡིན་པ་<sup>1)</sup>དེ་རྒྱལ་པོའི་སྐྱེད་ཀྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་  
 བྱེད་དུ་བརྟུག་པ་<sup>2)</sup>དེའི་མིང་ཡང་འཁོར་ལོས་<sup>3)</sup>སྐྱུར་<sup>4)</sup>བའི་རྒྱལ་པོ་ལྟ་ཆེན་པོ་ཞེས་བྱ་བ་མཐའ་<sup>5)</sup>བཞིན་རྣམས་  
 པར་རྒྱལ་བ་<sup>6)</sup>ཞེས་བྱ་བ་ནས།<sup>7)</sup> གཞན་སོ་<sup>8)</sup>ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་དུ་དོ།<sup>9)</sup> དེ་རྣམས་<sup>R.58a</sup>རྒྱལ་པོ་

བྱེད་པའི་<sup>38)</sup> ལྷན་ཆད་པར་མི་བྱ་ཞིང་སྐྱེས་བུ་ཐ་ཤལ་དུ་ལྷུང་བར་<sup>39)</sup> མི་བྱེད། ། ལུ་གཞོན་ལུ་འགའ་ཞིག་སྐྱེས་  
 ལུ་<sup>40)</sup> བཟང་པོ་ཡོད་པའི་དུས་འདི་ལྷ་བྱ་ལ།<sup>41)</sup> དགེ་བའི་ལམ་ངེས་པ་འདི་ལྷ་བྱ་ལ་<sup>42)</sup> ལུགས་པའི་རྗེས་སུ་<sup>43)</sup>  
 འཇུག་པར་བྱེད་པ་<sup>44)</sup> གང་ཡིན་པ་དེ་ནི།<sup>45)</sup> དེ་རྣམས་ཀྱི་ལྷན་ཆད་པར་མི་བྱེད་པ་ཡིན། དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱི་<sup>46)</sup>  
 ལྷན་བུ་ཐ་ཤལ་མ་ཡིན་པར་<sup>47)</sup> འཇུག་རོ་<sup>48)</sup> ། ། ལུ་གཞོན་ལུ་འགའ་ཞིག་\*སྐྱེས་བུ་བཟང་པོ་ཡོད་པའི་  
 དུས་འདི་ལྷ་བྱ་ལ།<sup>49)</sup> R264a དགེ་བའི་ལམ་ངེས་པ་<sup>50)</sup> འདི་ལྷ་བྱ་ལ་ལུགས་པའི་རྗེས་སུ་<sup>51)</sup> འཇུག་པར་མི་  
 བྱེད་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་<sup>52)</sup> དེ་རྣམས་ཀྱི་ལྷན་ཆད་པར་བྱེད་པ་ཡིན་པ། དེ་ནི་དེ་རྣམས་ཀྱི་\*སྐྱེས་  
 ལུ་ཐ་<sup>53)</sup> ཤལ་\*ཡིན་ཞོ་<sup>54)</sup> ། ། དེ་ལྷ་བས་ན་ང་ཁྱོད་ལ་དེ་སྐད་དུ་ཅི་<sup>D195b</sup> རྣམས་ཀྱང་ཁྱོད་ཀྱིས་\*དགེ་  
 བའི་ལམ་ངེས་པ་འདི་ལྷ་བྱ་ལ་ལུགས་པའི་རྗེས་སུ་<sup>55)</sup> འཇུག་པར་བྱ་ཞིང་། ལྷན་ཆད་<sup>56)</sup> པར་མི་བྱ་ཞིང་  
 ལྷན་བུ་ཐ་ཤལ་དུ་<sup>57)</sup> ལྷུང་བར་<sup>58)</sup> མི་བྱེད་<sup>59)</sup> ཞེས་སྐྱེད་<sup>60)</sup> ། །<sup>61)</sup>

- 1) P omits |, R. | | 2) T ལྱིས་ 3) DP omit | 4) NRT ལྷུང་བ་སྦྱོང་ 5) P inserts |
- 6) N ལྷ་མོ་ 7) P | 8) T omits རོ་ཉམས་ 9) T བཀུས་ 10) N ལྷ་མོ་, T ལྷས་པ་ 11) T |
- 12) T ཤལ་ 13) N omits | 14) T བས་ 15) DP omit | 16) P འདད་ 17) P བསྐྱེད་པར་
- 18) DP omit |, R ལྱེད། | 19) T བས་ 20) T omits མ་ 21) T བ་ 22) D ལྷོད་ 23) NT
- insert | 24) D པར་ 25) DP omit | 26) NT ཀྱི་ 27) NT གནམ་སུ་ 28) PT ཤིག་ 29) P
- གིས་ 30) R inserts | 31) T ལྷས་ 32) DP omit | 33) NT omit གི་ 34) T omits
- ངེས་པ་ 35) PT insert | 36) T དགེ་བ་པའི་ for ལུགས་པའི་ 37) N རྗེས་ 38) T ལྱེད་
- 39) DNRT པར་ 40) P ལུ་ 41) DP omit | 42) NT insert | 43) N རྗེས་ 44) N ལུ་ for
- པ་ 45) DP omit | 46) N ལྱིས་ 47) T བར་ 48) N འཇུག་རོ་ 49) DP omit | 50) N པར་
- 51) NT རྗེས་ 52) DP omit | 53) T ཐལ་ 54) N ཡིན་ 55) N རྗེས་ 56) DP འཆད་
- 57) P བ་ 58) DNRT པར་ 59) N inserts | | 60) N ལྷ་མོ་ 61) P |

B-1 [6] དེ་རྣམས་ཀྱི་པོ་ལྷ་<sup>T384a</sup>ཆེན་པོས་གཞོན་ལུ་ཐུ་བོ་ལྷུ་སྤིང་གི་དབང་ལུགས་ལ་དབང་བྱེད་དུ་  
 བཅུག་<sup>1)</sup> རྣམ།<sup>2)</sup> ལུ་ལ་བཙམ་བཅུག་<sup>3)</sup> འདི་<sup>4)</sup> ཉིད་ཀྱི་ལྷ་ཆེན་པོའི་<sup>N371a</sup>ཨ་མའི་ཆལ་འདི་ཉིད་དུ་ལྷུ་པོའི་  
 དྲང་སྤོང་གི་ཆངས་པར་སྦྱོད་པ་སྤྱད་དོ། །

- 1) T ཅུག་ 2) DP omit | 3) T ཅུག་ 4) N འདི་

B-1 [7] \*ལྷུ་པོ་ལྷ་ཆེན་པོའི་གཞོན་ལུ་ཐུ་བོ་\*ལྷུ་སྤིང་གི་དབང་ལུགས་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བཅུག་པ་  
 གང་ཡིན་པ་<sup>1)</sup> དེ་ཡང་།<sup>2)</sup> \*ལྷུ་པོ་ལྷ་ཆེན་པོ་\*ཞེས་བྱ་བ་འཁོར་ཡོས་<sup>3)</sup> ལྷུང་བའི་ལྷུ་པོ་མཐའ་བཞིར་རྣམ་  
 པར་ལྷུ་བ་<sup>4)</sup> ཞེས་བྱ་བ་རྣམ།<sup>5)</sup> གནས་སོ་<sup>6)</sup> ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་ཞོ་<sup>7)</sup> ། ། དེ་རྣམས་ལྷུ་

ལྷ་ཚེན་<sup>10)</sup>པོའི་སྤྲ་དང་ཁ་སྤྲ་འབྲེག་<sup>11)</sup>མཁན་གྱི་<sup>12)</sup>མིས་<sup>13)</sup>འཚོས་པ་ན་ཞེས་བྱ་བ་ནས། དེ་དེ་རྣམས་གྱི་<sup>14)</sup>ནང་ན་<sup>15)</sup>སྤྲེས་བྱ་བ་ཤལ་དུ་གྱུར་<sup>16)</sup>ཡིན་ཞོ་<sup>17)</sup>ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་དུའོ། ། དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོས་<sup>18)</sup>གཞོན་ཅུ་བོ་<sup>19)</sup>རྒྱལ་སྤོང་གྱི་<sup>20)</sup>དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བཅུག་<sup>21)</sup>ནས།<sup>22)</sup> རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྤོང་གི་<sup>23)</sup>ཚངས་པར་<sup>24)</sup>སྦྱོང་པ་སྦྱང་<sup>25)</sup>དོ། །<sup>26)</sup> ལྷན་དགའ་བོ་བྱ་དང་<sup>27)</sup>ཚ་བོ་དང་<sup>28)</sup>ཡང་ཚ་དང་<sup>29)</sup>གསུམ་<sup>30)</sup>ཚ་ལ་སོགས་<sup>T186b</sup>པ་དེ་ལྟར་རྒྱད་<sup>31)</sup>པས་<sup>32)</sup>ལྷ་ཚེན་པོ་བརྒྱད་ཁྲི་བཞི་སྟོང་མི་ཐེ་ལའི་ལྷ་ཚེན་པོའི་ཨ་མའི་<sup>33)</sup>ཚལ་འདི་ཉིད་དུ་རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྤོང་གི་<sup>34)</sup>ཚངས་པར་<sup>35)</sup>སྦྱོང་པ་སྦྱང་དོ། །

- 1) PT བ་ 2) N ལ་ for བ་ 3) N ལོ་ 4) N བརྒྱར་ 5) T མཐར་ 6) T བ་ 7) DNPT omit |
- 8) NT གནསོ་ 9) P | 10) P ཚོན་ 11) DP འབྲེག་ 12) N གྱིས་ 13) DP insert སྤྲ་དང་ཁ་སྤྲ་, T མི་ 14) N གྱིས་ 15) T དུ་ 16) DNRT བ་ 17) R inserts | | 18) N པོའི་
- 19) T inserts | 20) T omits གྱི་ 21) P བཅུག་ 22) DNPT omit | 23) N omits གི་
- 24) P བར་ 25) T སྦྱོང་ 26) R རེ།, NPT དེ། 27) DPR insert | 28) DPR insert |
- 29) DPR insert | 30) DP སུམ་ 31) DP བརྒྱད་ 32) P བས་, R inserts | 33) N མིའི་
- 34) N གིས་ 35) P བར་

A [9] དེ་རྣམས་གྱི་བཅའ་རྒྱལ་པོ་སྤྲ་ལུད་<sup>1)</sup>ཅེས་བྱ་བ་ཚོས་གྱི་རྒྱལ་པོ་<sup>2)</sup>ཚོས་དང་ལྷན་པ་<sup>3)</sup>།<sup>4)</sup> ཚོས་ལ་གནས་པའི་<sup>5)</sup>རྒྱལ་པོ་ཚེན་པོ་ཞིག་བྱང་ཟླ། དེ་བཅུན་<sup>N141a</sup>མོ་དང་། གཞོན་ཅུ་དང་། སྟོན་པོ་དང་། ཁྲི་བྱ་བ་<sup>6)</sup>དང་། སྤོང་མི་དང་། ཡུལ་མི་དག་དང་།<sup>7)</sup> ཚོས་སྦྱོང་དེ།<sup>8)</sup> སྦྱོན་པ་<sup>9)</sup>དག་གཏོང་། བསོད་རྣམས་དག་བྱེད་ཅིང་།<sup>10)</sup> བསྟེན་གནས་ལ་གནས་<sup>11)</sup>ཏེ།<sup>12)</sup> རྒྱལ་ཁྲིམས་ཡང་དག་པར་སྤངས་ནས་འདུག་གོ། །<sup>13)</sup>

- 1) T ལུད་ 2) R inserts | 3) PT བ་ 4) DNPT omit | 5) P བའི་ 6) D བ་ 7) DP omit |
- 8) DNPT omit | 9) PT བ་ 10) DNPT omit | 11) N omits ལ་གནས་
- 12) DP omit | 13) NPRT |

A [10] དེའི་ཚེ་ལྷའི་དབང་པོ་བརྒྱ་ཕྱིན་<sup>1)</sup>ལྷའི་མའུན་<sup>2)</sup>ས་<sup>3)</sup>ཚོས་<sup>4)</sup>བཟང་<sup>5)</sup>དུ།<sup>6)</sup> སུམ་<sup>P50b</sup>ཅུ་<sup>7)</sup>རྩ་གསུམ་པའི་ལྷ་འདུས་ཤིང་འཁོད་པ་རྣམས་གྱི་མའུན་དུ་བསྐྱགས་པ་རྫོང་<sup>8)</sup>པར་བྱེད་དེ་<sup>9)</sup>། ལོགས་པོ་དག་ལུས་འཕགས་གྱི་མི་རྣམས་གྱིས་<sup>10)</sup>རྟེན་པ་ལེགས་པར་རྟེན་དེ། ལུས་འཕགས་གྱི་མི་དེ་རྣམས་གྱི་རྒྱལ་པོ་<sup>11)</sup>སྤྲ་ལྷན་ཚོས་གྱི་<sup>R58b</sup>རྒྱལ་པོ་<sup>12)</sup>ཚོས་དང་ལྷན་པ་<sup>13)</sup>།<sup>14)</sup> ཚོས་ལ་གནས་པའི་རྒྱལ་པོ་ཚེན་པོ་དེ་བཅུན་མོ་དང་<sup>15)</sup>ཞེས་བྱ་བ་ནས།<sup>16)</sup> རྒྱལ་ཁྲིམས་ཡང་དག་པར་<sup>17)</sup>སྤངས་ཏེ་འདུག་གོ་<sup>18)</sup>ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་དུའོ། །

པོ་<sup>8)</sup>ལྷ་ཆེན་པོ་ལི་སྐྱ་དང་ཁ་<sup>9)</sup>སྐྱ་དག་སྐྱ་མཁན་གྱི་མིས་འཚོས་པ་ན་ཞེས་བྱ་བ་ནས། རྗེས་བྱ་བ་གལ་དུ་  
སྐྱར་བར་<sup>10)</sup>མི་བྱོལ་ཞེས་བྱ་བ་ལི་བར་གོང་མ་བཞིན་ནོ། <sup>11)</sup> དེ་ནས་རྒྱལ་པོ་ལྷ་ཆེན་པོས་གཞིན་ཏུ་བྱ་བོ་  
རྒྱལ་<sup>12)</sup>སྲིད་གྱི་དབང་ལྷག་ལ་དབང་བྱེད་དུ་བརྟུག་ནས། <sup>13)</sup> རྒྱལ་པོའི་དྲང་སྲོང་གི་ཚངས་པར་སྲོད་པ་སྐྱད་  
དོ་<sup>14)</sup>། ། \*དེ་ལྷར་<sup>15)</sup>བྱ་དང་ཚ་པོ་དང་<sup>16)</sup>ཡང་ཚ་བརྒྱད་པས་ལྷ་ཆེན་པོ་བརྒྱད་ཁྲི་བཞི་སྟོང་གིས་\*རྒྱལ་པོའི་  
དྲང་སྲོང་གི་ཚངས་པར་སྲོད་པ་<sup>P184b</sup>སྐྱད་<sup>17)</sup>དོ། །

1) P བ་ 2) DNPT omit | 3) N ལོ་ 4) R omits བ་ 5) DNPT omit | 6) N གནསོ་  
7) N བཞིནོ་ 8) P inserts | 9) T ཁས་ 10) DNRT བར་ 11) P | 12) R རྒྱས་ 13) DP  
omit | 14) DT སྲོད་དོ་, N སྲོདོ་ 15) NT ལྷ་ 16) NRT omit དང་ 17) R སྲོད་

B-2 [2] རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་སྲོན་བྱུང་བ་ཡུལ་མི་བྲི་ལ་འདི་ཉིད་དུ།<sup>1)</sup> དེ་རྣམས་གྱི་བྲམ་པོས་<sup>N372a</sup>རྒྱལ་པོ་  
སྐྱ་བྱུང་ཅེས་བྱ་བ་ཚོས་གྱི་རྒྱལ་པོ་<sup>2)</sup>ཚོས་དང་ལྷན་པ།<sup>3)</sup> ཚོས་ལ་གནས་པའི་རྒྱལ་པོ་\*ཞིག་བྱང་སྟེ། དེ་བརྟུན་  
མོ་དང་། གཞིན་ཏུ་དང་། སློན་པོ་དང་། ཁྲིས་གྱི་རུ་བ་<sup>4)</sup>དང་། ཁྲོང་མི་དང་། ཡུལ་མི་རྣམས་དང་ལྷན་  
ཅིག་དུ་ཚོས་སྲོད་ཅིང་རྒྱུན་པ་དག་གཏོང་། བསོད་ནམས་དག་བྱེད་པ། བསྟེན་གནས་ལ་ཉེ་བར་གནས་པ།  
རྒྱལ་ཁྲིམས་ཡང་དག་པར་སྲུངས་ཏེ་གནས་སོ་<sup>5)</sup>། །

bhūtapūrvam mahārājāśyām eva mithilāyām teṣām apaścimako nimir nāma  
rājābhūc cakravartī/ vistareṇa nimisūtraṃ rājasamyuktanipāte/

<sup>58c15</sup> 乃往古昔。於彌地羅城。有轉輪王。名泥彌多。我亦先於阿笈摩經中廣說。  
1) DNPT omit | 2) N inserts |, T inserts | | 3) DP omit | 4) DP བ་ 5) N  
གནསོ་

B-2 [3] དེའི་ཚེ་ལྷ་རྣམས་གྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་ཕྱིན་སུམ་ཏུ་<sup>1)</sup> ཙ་<sup>P185a</sup>གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་གྱི་གུང་ལ།<sup>2)</sup>  
ལྷ་རྣམས་གྱི་<sup>3)</sup>མདུན་<sup>4)</sup>ས་ཚོས་བཟང་དུ་<sup>5)</sup>\*ཚོགས་ཤིང་ལྷགས་པ་<sup>6)</sup>རྣམས་ལ་བཞུགས་པ་<sup>T385a</sup>བ་རྗེད་<sup>7)</sup>  
དོ། <sup>8)</sup> སྟོགས་པོ་དག་ལུས་འཕགས་གྱི་མི་རྣམས་གྱི་རྗེད་པ་ནི་ལེགས་པར་རྗེད་དེ། ལུས་འཕགས་གྱི་མི་  
དེ་རྣམས་གྱི་རྒྱལ་པོ་སྐྱ་བྱུང་ནི་ཚོས་གྱི་རྒྱལ་པོ་ཚོས་དང་ལྷན་པ་<sup>9)</sup>། <sup>10)</sup> ཚོས་ལ་གནས་པའི་རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་

སྒྲིགས་པོ་དག་ཀྱི་དང་ཅག་ཀྱི་ལོ་སྤྱི་ལྟར་ལྟ་བུར་<sup>19)</sup>འདོད་དམ། ཀོ་ལུ་<sup>20)</sup>ཤི་ཀ་ཤིན་ཏུ་འཚལ་ལོ་<sup>21)</sup>། ། སྒྲིགས་པོ་དག་དེའི་ཕྱིར་ཀྱི་དང་ཅག་སྤོང་ཅིག་དང་།<sup>22)</sup> ཁོ་བོས་རེ་ཞིག་<sup>23)</sup>ལྟལ་པོ་སྤྱི་ལྟར་བཟོའོ་<sup>24)</sup>། །

- 1) R ལྱིན་ 2) D འདུན་ 3) T ཅས་ for ས་ 4) P ཚོས་པ་ 5) P བང་ 6) DP omit |  
 7) DP བཅུ་ 8) NTP བཟོད་ 9) P ད་ 10) T ལྱི་ 11) N inserts | | 12) R inserts |  
 13) T བ་ 14) DP omit | 15) NT insert | 16) DNPT omit | 17) R བས་ 18) N  
 འདུགོ་, R inserts | 19) P བར་ 20) DP ཀྱོ་ 21) NT འཚལོ་ 22) DP omit | 23) NPT  
 ཤིག་ 24) NRT ལྟོའོ

A [11] དེ་ནས་ལྟལ་པོ་དང་པོ་བརྒྱ་ལྱིན་<sup>1)</sup>དཔེར་ན་<sup>2)</sup>སྤྱི་བུ་སྤོང་བས་དང་ལྟ་བུ་པའི་<sup>3)</sup>ལག་པ་བསྐྱམ་པ་ལས་<sup>4)</sup>བརྒྱུ་བའམས་<sup>5)</sup>། བརྒྱུ་བ་<sup>6)</sup>ལས་<sup>7)</sup>བསྐྱམ་པ་ཅམ་གྱིས་སྤྱི་བུ་<sup>8)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་  
 ལྟལ་མདུན་<sup>9)</sup>ས་ཚོས་བཟང་ནས་མི་སྤང་བར་གྱུར་དེ། མི་བྱི་ལར་ལྟལ་པོ་<sup>10)</sup>སྤྱི་<sup>11)</sup>ལྟར་གྱི་ཁང་བཟང་ས་  
 T187a.སྤྱི་<sup>12)</sup>འདུག་གོ་<sup>13)</sup>། །<sup>14)</sup> འདི་སྐད་<sup>N141b</sup>ཅེས་ཀྱང་སྤྱི་བུ་དེ། ལྟལ་ལྟར་ལྟལ་ལྟལ་མདུན་<sup>15)</sup>ས་  
 ཚོས་<sup>16)</sup>བཟང་དུ།<sup>17)</sup> ལྟལ་ལྟལ་<sup>18)</sup>ཅ་གསུམ་<sup>19)</sup>པའི་ལྷ་འདུས་ཤིང་འདུག་པ་རྣམས་བཟླགས་པ་<sup>20)</sup>ཟོད་<sup>21)</sup>  
 པ་རྒྱུ་<sup>22)</sup> ལྟལ་<sup>D55a</sup>ལྱིས་སྤོང་བ་ལེགས་པར་སྤོང་དོ། ། སྒྲིགས་པོ་ལུས་འཕགས་ཀྱི་མི་རྣམས་ཀྱིས་སྤོང་བ་  
 ཞེས་བྱ་བ་ནས།<sup>23)</sup> ལྟལ་ལྟལ་ལང་དག་པར་སྤོང་ས་དེ་<sup>24)</sup>འདུག་པར་<sup>25)</sup>བྱེད་དོ་<sup>26)</sup>ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་  
 མ་བཞིན་དུའོ། ། ལྟལ་ལྟལ་སྤྱི་བུ་<sup>27)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་བཟླ་བའི་ཕྱིར་འགོ་འདོད་དམ། ཀོ་ལུ་<sup>28)</sup>  
 ཤི་ཀ་བདག་སྤྱི་བུ་<sup>29)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་བཟླ་བའི་ཕྱིར་མཆོ་བར་འཚལ་ལོ་<sup>30)</sup>། ། ལྟལ་ལྟལ་དེའི་ཕྱིར་  
 ཟོད་ཅིག་དང་།<sup>31)</sup> རེ་ཞིག་<sup>32)</sup>ཁོ་བོས་ཀྱི་དང་ཅག་ཅན་ཅང་ཤེས་སྤོང་དང་<sup>R59a</sup>ལྟལ་པའི་<sup>33)</sup>ཤིང་རྩ་བསྐྱར་གྱིས།<sup>34)</sup>  
 དེའི་ནང་དུ་ལྟལ་ལྟལ་ལ་མ་གཡོ་བར་ཤོག་ཅིག་<sup>35)</sup>། དེ་བཞིན་དུ་བཟློའོ་<sup>36)</sup>ཞེས་<sup>37)</sup>ལྟལ་པོ་སྤྱི་ལྟར་གྱིས་ལྟལ་  
 དང་པོ་བརྒྱ་ལྱིན་གྱི་<sup>38)</sup>ལྟར་མཉན་དོ། །

- 1) R inserts | 2) T inserts | 3) T བའི་ 4) NRT omit ལས་ 5) NPRT བའམས་ 6) T  
 ས་ 7) NRT omit ལས་ 8) DP བཅུ་ 9) D འདུན་ 10) T ལུ་ 11) P ས་ 12) NP བཟང་སྤྱི་  
 13) N འདུགོ་ 14) NPRT | 15) D འདུན་ 16) D ཚོས་ 17) DP omit | 18) DP བཅུ་  
 19) P ལྟལ་སྤྱི་ 20) P inserts | 21) NP བཟོད་ 22) DNPT omit | 23) DP omit |  
 24) NT insert | 25) NT འདུལ་བར་ 26) N ལྱེད་, R inserts | 27) D བཅུ་ 28) DP ཀྱོ་  
 29) DP བཅུ་ 30) N འཚལོ་ 31) DP omit | 32) NPT ཤིག་ 33) PT བའི་ 34) DNPT  
 omit | 35) DPT ཤིག་ 36) N inserts | | 37) D ལས་ 38) T omits ལྱི་

ཡིན་ཏེ། དེ་བཅུན་མོ་དང་ཞེས་བྱ་བ་ནས།<sup>11)</sup> ལྷན་ཅིག་དུ་ཚོས་སྤྱད་ཅིང་<sup>12)</sup> ཚུལ་ཁྲིམས་ཡང་དག་པར་སྒྲུངས་  
ཏེ་<sup>13)</sup>གནས་སོ་<sup>14)</sup>ཞེས་བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་ནོ་<sup>15)</sup>། །<sup>16)</sup> སྟོགས་པོ་དག་ཀྱི་དྲ་ཅག་རྒྱུ་ལོ་སྤྱད་ལྟ་<sup>17)</sup>  
བར་འདོད་དམ། ཀོ་བུ་<sup>18)</sup>ཤི་ཀ་མཚོ་ལ་དུ་འཚལ་ལོ་<sup>19)</sup>། །<sup>20)</sup> སྟོགས་པོ་དག་དེའི་ཕྱིར་ཀྱི་དྲ་ཅག་སྤོང་ཅིག་  
དང་།<sup>21)</sup> ཁོ་བོས་ཇི་ཚུལ་ལོ་སྤྱད་བཟླ་ག་པར་བྱའོ། །

1) DP བཅུ 2) DNPT omit | 3) NRT omit གྱི 4) D འདུན་ 5) N བཟངསུ, RT བཟངས་  
སུ་ 6) NT ལྷ་ for ལྷགས་པ་ 7) DP རྫོང་ 8) DNP དེ། 9) T བ་ 10) DP omit |  
11) DNPT omit | 12) T ཅིག་ 13) P inserts | 14) NT གནསོ་ 15) N བཞིནོ་ 16) P |  
17) N བཟླ་ 18) DP ཀོ་ 19) NT འཚལོ་ 20) N |, P omits | | 21) DP omit |

B-2 【4】 དེ་ནས་<sup>1)</sup>ལྷ་རྣམས་ཀྱི་<sup>2)</sup>དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་དཔེར་ན་སྤྲེལ་བུ་མཐུ་དང་ལྷན་པའི་<sup>3)</sup>N<sup>372b</sup>ལག་  
པ་བསྐྱམ་<sup>4)</sup>པ་ལས་<sup>R265b</sup>བརྒྱུང་བ་འཕྲ།<sup>5)</sup> བརྒྱུང་བ་<sup>6)</sup>D196bལས་བསྐྱམ་<sup>7)</sup>པ་ཙམ་གྱིས།<sup>8)</sup> ལྷ་རྣམས་  
ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་སུམ་བུ་<sup>9)</sup>ཙ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་<sup>10)</sup>རྒྱ་ནས་<sup>11)</sup>མི་སྣང་བར་ལྱུར་ཏེ། མི་ཐིལ་ལར་  
རྒྱལ་པོ་སྤྱད་ལྷན་གྱི་ཁང་བཟངས་སུ་<sup>12)</sup>ཕྱིན་ནས་འདི་སྐད་ཅེས་\*སྤྲེལ་སོ་<sup>13)</sup>། །<sup>14)</sup> སྤྱད་ལྷན་ཀྱི་དྲ་  
ཀྱིས་<sup>15)</sup>རྫོང་པ་ནི་ལེགས་པར་རྫོང་དེ་<sup>16)</sup>། གང་གི་<sup>17)</sup>ཕྱིར་སུམ་བུ་<sup>18)</sup>ཙ་གསུམ་པའི་<sup>19)</sup>ལྷ་རྣམས་<sup>20)</sup>ལྷའི་  
མདུན་<sup>21)</sup>ས་ཚོས་བཟང་དུ་<sup>22)</sup>ཚོགས་<sup>23)</sup>ཤིང་འདུས་པ་<sup>24)</sup>རྣམས་ཀྱི་དྲ་བཟླ་གས་པ་རྫོང་<sup>25)</sup>པར་བྱེད་དེ་<sup>26)</sup>།  
སྟོགས་པོ་དག་ལུས་འཕམ་གསུ་མི་རྣམས་ཀྱི་<sup>27)</sup>རྫོང་པ་ཞེས་བྱ་བ་ནས།<sup>28)</sup> ཚུལ་ཁྲིམས་ཡང་དག་པར་  
སྒྲུངས་ཏེ་གནས་སོ་<sup>29)</sup>ཞེས་<sup>30)</sup>བྱ་བའི་བར་གོང་མ་བཞིན་ནོ་<sup>31)</sup>། ། སྤྱད་ལྷན་སུམ་བུ་<sup>32)</sup>ཙ་གསུམ་པའི་ལྷ་  
རྣམས་ལ་<sup>33)</sup>ལྷ་<sup>34)</sup>ཞིང་འགོ་འདོད་དམ། ཀོ་བུ་<sup>35)</sup>ཤི་ཀ་བདག་སུམ་<sup>T385b</sup>བུ་<sup>36)</sup>ཙ་གསུམ་པའི་<sup>37)</sup>ལྷ་རྣམས་  
ལ་<sup>38)</sup>ལྷ་<sup>39)</sup>ཞིང་མཚེ་འཚལ་ལོ་<sup>40)</sup>། །<sup>41)</sup> སྤྱད་<sup>42)</sup>དེའི་ཕྱིར་ཀྱི་དྲ་<sup>43)</sup>སྤོང་ཅིག་། \*ཁོ་བོས་ཇི་<sup>44)</sup>ཅང་  
ཤེས་སྤོང་\*ལྷན་གྱི་ཤིང་རྫོང་ལ་བསྐྱར་གྱིས། དེར་ཀྱི་དྲ་<sup>45)</sup>ལུགས་<sup>46)</sup>ལ་མ་གཡོ་བར་ཤོག་ཅིག་<sup>47)</sup>། ཚུལ་  
པོ་སྤྱད་ཀྱིས་དེ་བཞིན་<sup>48)</sup>འཚལ་ལོ་<sup>49)</sup>ཞེས་<sup>50)</sup>\*ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་ལས་མཉམ་ཏེ། །<sup>51)</sup>

1) T omits phrases from here to note 10). 2) T jumps back to here from note  
23)(T). 3) RT' བའི་ 4) R བསྐྱམས་ 5) NR omit བརྒྱུང་བ་འཕྲ།, P བརྒྱུང་ནས་, T' བརྒྱུངས་པ་  
འཕྲ།(without |) 6) PT' བ་, N inserts མཐར་བརྒྱུང་བ་ 7) PR བསྐྱམས་ 8) DNP omit |,  
T' གྱི་(without |) 9) DP བཅུ་, R ལྷ་ 10) See note 1). 11) R ལྷ་ 12) NTT' བཟངསུ་  
13) NT' སྤྲེལོ་ 14) P | 15) DR ཀྱི་ 16) TT' རྫོང་དེ་ 17) P ཤིས་ 18) DP བཅུ་ 19) P བའི་  
20) R omits ལྷ་རྣམས་ 21) D འདུན་ 22) NTT' བཟངསུ་, PR བཟངས་སུ་ 23) See note 2).  
24) R བ་ 25) NT བརྫོང་ 26) DP ཅིང་ for དེ་ 27) NT ཀྱིས་ 28) DNPT omit |

A [12] དེ་ནས་ལྟའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་སྲུང་བྱ་<sup>1)</sup> ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ཚང་དུ་སོང་ནས་<sup>2)</sup> །<sup>3)</sup> ལ་  
 ལོ་སྦྱར་བ་མ་ལ་གདུ་ལ་<sup>4)</sup> སྦྱས་པ། མ་ལ་གདུ་ཁྱོད་སོང་ལ་སྦྱར་བ་ལོ་ནར་རྟ་ཅང་ཤེས་སྟོང་དང་ལྡན་པའི་<sup>5)</sup>  
 ཤིང་རྩ་ཤོམས་ཏེ།<sup>6)</sup> རྒྱལ་པོ་སྤྱུ་ལྷུང་གང་ན་བ་དེར་སོང་ལ་ཕྱིན་ནས་འདི་རྒྱང་ཅེས།<sup>7)</sup> སྤྱུ་ལྷུང་ཁྱོད་ལ་ལྟའི་  
 དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས།<sup>8)</sup> རྟ་ཅང་ཤེས་སྟོང་དང་<sup>9)</sup> ལྡན་པའི་<sup>10)</sup> ཤིང་རྩ་བསྐྱར་བ་འདི་ཡིན་གྱིས་<sup>11)</sup> །<sup>P51a</sup>  
 འདིར་ཁྱོད་ལྷགས་ལ་མ་གཡོ་བར་ཤོག་ཅིག་<sup>12)</sup> ཅེས་སྟོས་ཤིག།<sup>N142a</sup> ཀོའུ་<sup>13)</sup> ཤི་ཀྱའུ་ཁྱོད་ཀྱིས་གསུངས་པ་ཤིན་  
 དུ་<sup>14)</sup> བཟང་ངོ་ཞེས་<sup>15)</sup> ལ་ལོ་སྦྱར་བ་མ་ལ་གདུས་ལྟའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱི་ལྷར་མཉན་ནས།<sup>16)</sup> སྦྱར་བ་ལོ་  
 རྟ་ཅང་ཤེས་སྟོང་དང་ལྡན་པའི་<sup>17)</sup> ཤིང་རྩ་བཤམས་ནས།<sup>18)</sup> རྒྱལ་པོ་སྤྱུ་ལྷུང་གང་ན་བ་<sup>19)</sup> དེར་སོང་སྟེ་  
 T187b ཕྱིན་པ་དང་<sup>20)</sup> འདི་རྒྱང་ཅེས་སྦྱས་མོ་<sup>21)</sup> ། ། སྤྱུ་ལྷུང་ཁྱོད་ལ་ལྟའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས་རྟ་ཅང་<sup>22)</sup>  
 ཤེས་སྟོང་དང་ལྡན་པའི་<sup>23)</sup> ཤིང་རྩ་བསྐྱར་བ་འདི་ཡིན་གྱིས། འདིར་ཁྱོད་<sup>24)</sup> ལྷགས་ལ་མ་གཡོ་བར་ཤོག་ཅིག་<sup>25)</sup>  
 ཅེས་ཟེར་རོ་<sup>26)</sup> ། ། ཀུན་དགའ་བོ་<sup>27)</sup> རྒྱལ་པོ་སྤྱུ་ལྷུང་རྟ་ཅང་ཤེས་སྟོང་དང་ལྡན་པའི་<sup>28)</sup> ཤིང་རྩའི་ཚང་དུ་མི་  
 གཡོ་བར་ལྷགས་པ་དང་།

1) DP བརྒྱ་ 2) T ཤིག་ 3) DP omit | 4) T གདུལ་ 5) PT བའི་ 6) DP omit |  
 7) NT omit | 8) DPR omit | 9) N omits དང་ 10) T བའི་ 11) T རྒྱ་ 12) DP ཤིག་,  
 T ཤིག། 13) DP ཀོ་ 14) P དུ་ 15) R inserts | 16) DP omit | 17) T བའི་ 18) DP  
 omit | 19) T བར་ 20) T རྟ་ཅང་ for པ་དང་ 21) N སྦྱསོ 22) P ཅིང་ 23) T བའི་ 24) N  
 ཁྱོད་ 25) DPT ཤིག་ 26) N ཟེར་, P ཟེར་ 27) T དགའོ 28) T བའི་

A [13] དེ་ནས་ལ་ལོ་སྦྱར་བ་མ་ལ་གདུས་<sup>1)</sup> རྒྱལ་པོ་སྤྱུ་ལྷུང་ལ་འདི་རྒྱང་ཅེས་སྦྱས་མོ། ། སྤྱུ་<sup>2)</sup> ལྷུང་ཁྱོད་  
 ཀྱི་ཤིང་རྩ་གང་<sup>R59b</sup> འོགས་སྤྱུ་<sup>3)</sup> དྲང་<sup>4)</sup> ། གང་ན་སེམས་ཅན་སྤྲིག་པའི་ལས་ཅན་རྣམས་སྤྲིག་པ་མི་དགོ་བའི་<sup>5)</sup>  
 ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་<sup>6)</sup> སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>7)</sup> རྟོང་བ་འོགས་སུ་འམ་<sup>8)</sup> ། གང་ན་སེམས་ཅན་དགོ་བའི་<sup>9)</sup> ལས་  
 ཅན་རྣམས་ལས་དགོ་བའི་<sup>D55b</sup> རྣམ་པར་སྤྲིན་<sup>10)</sup> པ་སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>11)</sup> རྟོང་བ་འོགས་སུ་<sup>12)</sup> དྲང་<sup>13)</sup> ། མ་  
 ལ་གདུ་དེའི་ཕྱིར་ལོ་བོས་གང་དུ་གཉིས་ཀ་<sup>14)</sup> མཐོང་བར་འགྱུར་བ།<sup>15)</sup> གང་ན་སེམས་ཅན་སྤྲིག་པའི་ལས་ཅན་  
 རྣམས་སྤྲིག་པ་མི་དགོ་བའི་ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>16)</sup> རྟོང་བ་དག་<sup>17)</sup> ཡོད་<sup>18)</sup> པ་དང་། གང་



- 29) NT གནསོ 30) N ཤེས་ 31) NT བཞིནོ 32) DP བརྟ་ 33) DPR omit ལ་ 34) N བཟླ་  
 35) DP ཀྲོ 36) DP བརྟ་ 37) P བའི་ 38) P omits ལ་ 39) NT བཟླ་ 40) N འཚལོ་  
 41) P ། 42) DP insert གྲོད་ 43) DP omit གྲོད་ 44) R རྟེ་ 45) T omits གྲོད་ 46) T  
 བཟུགས་ 47) DNPT ཤིག་ 48) DP insert ཅུ་ 49) N འཚལོ་ 50) R inserts ། 51) NT  
 ཏྲེ།

B-2 【5】 དེ་ནས་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་སྲུང་ལུ་<sup>1)</sup> ཅ་གསུམ་པའི་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་སོང་  
 རྟེ།<sup>2)</sup> ལ་ལོ་སྲུང་བ་མ་ལ་གདུལ་སྲུང་སྲུང་<sup>3)</sup> པ། མ་ལ་གདུལ་གྲོད་སོང་<sup>4)</sup> ལ།<sup>5)</sup> \*ཅང་ཤེས་སྟོང་\*ལྟ་བྱི་ཤིང་  
 རྟེ་སྲུང་དུ་ཚོས་ལ།<sup>6)</sup> རྟེ་སྲུང་དུ་ཚོས་ལ་སྲུང་གང་ན་བ་<sup>N373b</sup> དེར་སོང་སྟེ་བྱིན་རྟེ།<sup>7)</sup> འདི་སྟེང་ཅེས་<sup>8)</sup> རྟེ་  
 རྟེ་གྲོད་<sup>9)</sup> ལ་<sup>10)</sup> རྟེ་རྟེ་སྲུང་གྲོད་སོང་བའི་བརྟ་བྱིན་གྱིས།<sup>11)</sup> \*ཅང་ཤེས་སྟོང་\*ལྟ་བྱི་ཤིང་རྟེ་བསྐྱར་བ་འདི་ཡིན་  
 ལྱིས།<sup>12)</sup> དེར་གྲོད་ལྟུགས་ལ་མ་<sup>13)</sup> གཡོ་བར་<sup>14)</sup> ཤིག་<sup>R266a</sup> ཅིག་<sup>15)</sup> ཅེས་ཀྱིས་ཤིག། ཀྲོད་<sup>16)</sup> ཤིག་གྲོད་  
 ལྱིས་གསུངས་པས་ཤིན་ཏུ་<sup>17)</sup> མ་རྟོངས་སོ་<sup>18)</sup> ཞེས་<sup>19)</sup> ལ་ལོ་སྲུང་བ་མ་ལ་གདུལ་སྲུང་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་  
 ལས་མཉམ་ལྟར་<sup>20)</sup> རྟེ་སྲུང་དུ་\*ཅང་ཤེས་སྟོང་\*ལྟ་བྱི་ཤིང་རྟེ་བཅས་ཏེ། རྟེ་སྲུང་དུ་ཚོས་ལ་<sup>21)</sup>  
 སོང་ནས་བྱིན་པ་དང་<sup>22)</sup> འདི་སྟེང་ཅེས་སྲུང་སོ་<sup>23)</sup> པ། རྟེ་སྲུང་གྲོད་ལ་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་གྱིས་  
 \*ཅང་ཤེས་སྟོང་\*ལྟ་བྱི་ཤིང་རྟེ་བསྐྱར་བ་<sup>24)</sup> འདི་ཡིན་<sup>25)</sup> ལྱིས་<sup>26)</sup> ཤིག་<sup>27)</sup> འདིར་གྲོད་ལྟུགས་ལ་མ་གཡོ་བར་  
 ཤིག་ཅིག་<sup>28)</sup> ཅེས་མཛེས་ཏེ། རྟེ་སྲུང་དུ་ཚོས་ལ་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་\*ཅང་ཤེས་<sup>29)</sup> སྟོང་\*ལྟ་བྱི་ཤིང་རྟེ་བསྐྱར་ལ་  
 བཟུགས་པ་  
 དང་།

- 1) DP བརྟ་ 2) DP omit ། 3) R རྟེ་སྲུང་ 4) P འོངས་ 5) DP omit ། 6) DP omit །  
 7) DP omit ། 8) DP insert ། 9) NRT omit གྲོད་ 10) P omits ལ་ 11) DP omit །  
 12) DNP omit ། 13) N མི་ 14) P བར་ 15) DNPT ཤིག་ 16) DP ཀྲོ་ 17) D ཅུ་  
 18) NT རྟོང་སོ་ 19) N ཤེས་, R inserts ། 20) DNPT omit ། 21) T དེ་ 22) NT insert །  
 23) NT རྟེ་སོ་ 24) P བ་ 25) R ཡིན་ 26) NT ལྱི་ 27) DNPT omit ། 28) DNPT ཤིག་  
 29) NRT insert རྟེ་

B-2 【6】 དེ་ནས་ལ་ལོ་སྲུང་<sup>D197a</sup> མ་ལ་གདུལ་སྲུང་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་གྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་  
 གང་རྟེས་དང་<sup>2)</sup> གང་ན་སེམས་ཅན་སྟེང་གི་ལས་ཅན་རྟེས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་  
 སྟེང་བ་\*རྟེས་སྲུང་<sup>3)</sup> སྟེང་བ་རྟེས་སྲུང་། གང་ན་སེམས་ཅན་དགེ་བའི་ལས་ཅན་རྟེས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་ཀྱིས་  
 བར་སྟེང་བ་\*རྟེས་སྲུང་<sup>4)</sup> སྟེང་བ་རྟེས་དང་། མ་ལ་གདུལ་དེའི་ཕྱིར་\*གང་ན་སེམས་<sup>T386a</sup> ཅན་སྟེང་གི་ལས་  
 ཅན་རྟེས་<sup>5)</sup> སྟེང་བ་རྟེས་དང་། རྟེ་སྲུང་དུ་ཚོས་ལ་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་<sup>N373a</sup> ལ་ལྟ་རྒྱུ་ལ་འགྲུབ་པའི་བརྟ་བྱིན་<sup>6)</sup> སྟེང་བ་<sup>7)</sup> སྟེང་བ་<sup>8)</sup> སྟེང་བ་<sup>9)</sup> སྟེང་བ་<sup>10)</sup> གང་

ན་སེམས་ཅན་<sup>19)</sup>དག་<sup>N142b</sup>བའི་ལས་ཅན་རྣམས་ལས་དག་བའི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>20)</sup>སྦྱང་བ་  
དག་ཡོད་པ་དེར་ཤིང་རྟ་དྲོངས་ཤིག །དེ་ནས་ཁ་ལོ་སྦྱར་བ་མ་ལ་གདུས་ཀྱིས་པོ་སུ་<sup>21)</sup>ལྷུང་གི་ཤིང་རྟ་<sup>22)</sup>ཀྱིས་  
པོ་སུ་ལྷུང་གིས་གང་<sup>23)</sup>ན་སེམས་ཅན་སྤྲིན་པའི་ལས་ཅན་རྣམས་<sup>24)</sup>སྤྲིན་པ་མི་དག་བའི་ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་  
སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>25)</sup>སྦྱང་བ་<sup>26)</sup>དག་<sup>27)</sup>ཡོད་པ་དང་། གང་ན་སེམས་ཅན་དག་བའི་ལས་ཅན་རྣམས་ལས་དག་  
བའི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་སོ་སོར་ཉམས་སུ་<sup>28)</sup>སྦྱང་བ་དག་ཡོད་པ་<sup>29)</sup>གཉིས་ཀ་<sup>30)</sup>ཀྱིས་པོ་སུ་ལྷུང་གིས་<sup>31)</sup>ཇི་<sup>32)</sup>  
ལྟར་མཐོང་བར་འགྱུར་བ་<sup>33)</sup>དེ་<sup>34)</sup>ལྟར་དང་སོ་<sup>35)</sup>། །

- 1) R inserts | 2) T ལྷ་ 3) NPT འོགསུ་ 4) R དངས་, T དྲང་ 5) P བའི་ 6) T བ་
- 7) NP ཉམསུ་ 8) NP འོགསུའམ་, R འོགས་སུའམ་, T འོགསུའམ་ 9) D བའི་ 10) T སྤོན་
- 11) NT ཉམསུ་ 12) NP འོགསུ་, T འོགསུ་ 13) R དངས་ 14) DNPT གཉི་ག་ 15) DP omit  
། 16) NPT ཉམསུ་ 17) P བདག་ 18) D ཡང་ 19) N སེན་ for སེམས་ཅན་ 20) NPT ཉམསུ་
- 21) T ལྷ་ 22) RT insert | 23) P inserts བ་ 24) N omits སྤྲིན་པའི་ལས་ཅན་རྣམས་
- 25) NPT ཉམསུ་ 26) T བ་ 27) P དང་། 28) NT ཉམསུ་ 29) T བར་ 30) DNPT གཉི་ག་
- 31) T omits ཀྱིས་ 32) P ཇི་ 33) P བའི་ 34) P ད་ 35) NT དང་སོ་

A [14] ཀྱུ་དགའ་བོ་<sup>1)</sup>ཀྱིས་པོ་སུ་ལྷུང་སུ་མ་<sup>T188a</sup>ལུ་<sup>2)</sup>རྩ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་རང་དུ་སོང་ཞུས།<sup>3)</sup>  
ཀྱིས་པོ་སུ་<sup>4)</sup>ལྷུང་ལྷའི་མདུན་<sup>5)</sup>ས་ཚེས་བཟང་དུ་ལྷགས་པ་དང་།<sup>6)</sup> ལྷའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས་ཀྱིས་པོ་སུ་ལྷུང་  
ལ་སྟུན་ཕྱིད་བསྐྱབས་ཞུས།<sup>7)</sup> ཀྱིས་<sup>P51b</sup>པོ་སུ་ལྷུང་དང་ལྷའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་སྟུན་ཕྱིད་ཕྱིད་<sup>R60a</sup>ལ་འཁོད་  
དོ། ། ཀྱུ་དགའ་བོ་<sup>8)</sup>ཀྱིས་པོ་སུ་ལྷུང་དང་ལྷའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་སྟུན་ཕྱིད་ཕྱིད་ལ་འཁོད་པ་ན།<sup>9)</sup> ལྷ་པར་  
རམ།<sup>10)</sup> བསམ་པའམ་<sup>11)</sup>།<sup>12)</sup> བ་དང་དུ་བྱ་བ་མེད་ཀྱི་<sup>13)</sup>། གཞན་དུ་ན་ལྷའི་དབང་<sup>14)</sup>པོ་བརྒྱ་བྱིན་ནི་  
མིག་འཇུགས་པར་མི་བྱེད་དོ། །<sup>15)</sup>

- 1) T དགའོ་ 2) DP བརྒྱ་ 3) DP omit | 4) T ལྷ་ 5) DP འདུན་ 6) NT omit | 7) DP  
omit | 8) T དགའོ་ 9) DP omit | 10) D omits | 11) NPR བ་འམ་, T བ་འམ་ 12) D  
omits | 13) NRT ཀྱིས་ 14) R དཔང་ 15) P |

A [15] དེ་ནས་ལྷའི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས།<sup>1)</sup> ཀྱིས་པོ་<sup>2)</sup>སུ་ལྷུང་ལ་འདི་རྟེན་ཅེས་སྤྲིན་སོ་<sup>3)</sup>། ། ལུ་  
ལྷུང་འདི་ཉིད་དུ་འདུག་ལ་<sup>4)</sup>སུ་ལྷུང་ལྷུང་དགའ་བར་སྦྱོང་ཅིག །འདོད་པའི་ཡོན་ཏན་ལྡེ་འཕྱོར་<sup>N143a</sup>ཅིང་ལྷན་  
པ་ལ་ཅིང་མོ་བྱིས་ཤིག །དགའ་བར་སྦྱོང་ཅིག །དགའ་མཁུར་<sup>5)</sup>སྦྱོང་ཅིག །དེ་ནས་ཀྱིས་པོ་སུ་ལྷུང་གིས་དེའི་  
ཚེ་རྟོགས་སུ་<sup>6)</sup>བཅད་དེ་སྤྲིན་པ།  
ཇི་ལྟར་སྦྱོང་དང་ཤིང་རྟ་དག།<sup>7)</sup>

ན་སེམས་ཅན་དགེ་བའི་ལས་ཅན་རྣམས་ལས་དགེ་བའི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་\*ཉམས་སུ<sup>11)</sup>སྤྱོད་བ་དག་ཡོད་པ་<sup>12)</sup>  
གཉིས་ཀ<sup>13)</sup>བཟླས། དེ་དག་གང་ན་བ་དེ<sup>14)</sup>འོགས་སུ<sup>15)</sup>གིང་རྩ་དྲོང་ཤིག། དེ་ནས་ལ་ལོ་རྒྱུར་བ་མ་ལ་  
གདུས་རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་\*ཀྱིས་ཅི་ནས་ཀྱང་གང་ཅ་སེམས་ཅན་སྤིག་པའི་ལས་ཅན་རྣམས་སྤིག་<sup>16)</sup>པ་མི་དགེ་བའི་  
ལས་ཀྱི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་\*ཉམས་སུ<sup>17)</sup>སྤྱོད་བ་\*ཡོད་པ་དང་<sup>18)</sup>། གང་ན་སེམས་<sup>R266b</sup> ཅན་དགེ་<sup>19)</sup>བའི་  
ལས་ཅན་རྣམས་ལས་དགེ་བའི་རྣམ་པར་སྤྲིན་པ་\*ཉམས་སུ<sup>20)</sup>སྤྱོད་བ་<sup>21)</sup>\*ཡོད་པ་གཉིས་ཀ་<sup>22)</sup>\*མཐོང་བར་  
འགྱུར་བ་<sup>23)</sup>དེ་ལྟར་<sup>24)</sup>རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་ལྷན་གྱི་གིང་རྩ་དྲངས་སོ<sup>25)</sup>། །

- 1) R ཀྱིས་ 2) T བར་ 3) R བ་ 4) T ཀྱིས་ 5) NT ཉམས་སུ་ 6) N ཉམས་སུ་ 7) NT insert |
- 8) NT ཉམས་སུ་ 9) T བར་ 10) N omits དང་ 11) N ཉམས་སུ་ 12) NRT བར་ 13) N ཀ་
- 14) T དེར་ 15) NT འོགས་སུ་ 16) P ཤིག་, NT omit བའི་ལས་ཅན་རྣམས་སྤིག་ 17) NT ཉམས་སུ་
- 18) NT ཅ་ for དང་ 19) P དགེ་ 20) N ཉམས་སུ་ 21) P བ་ 22) N གཉིས་ཀ་, DPT གཉིས་ཀ་
- 23) P བ་ 24) R inserts | 25) N དྲངས་སོ

B-2 [7] \*རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་སྤྲུལ་ཅུ་<sup>1)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་རང་དུ་བྱིན་ནས།<sup>2)</sup> རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་  
ལྷ་རྣམས་ཀྱི་མདུན་<sup>3)</sup>མ་<sup>4)</sup>ཚོས་བཟང་དུ་<sup>5)</sup>ལྷགས་པ་དང་། ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས་རྒྱལ་པོ་སུ་  
ལྷུང་ལ་སྟུན་ཕྱེད་བཟབས་<sup>6)</sup>ནས།<sup>7)</sup> རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་དང་<sup>8)</sup>ལྷ་རྣམས་ཀྱི་<sup>9)</sup>དབང་པོ་བརྒྱ་<sup>P186a</sup>བྱིན་སྟུན་ཕྱེད་  
ཕྱེད་<sup>10)</sup>ལ་འདུག་གོ<sup>11)</sup>། <sup>12)</sup> རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་དང་<sup>13)</sup>ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་སྟུན་ཕྱེད་  
ཕྱེད་ལ་འདུག་པ་ན།<sup>14)</sup> ལྷ་དང་པར་རམ། བསམ་པའམ<sup>15)</sup>།<sup>16)</sup> མ་དང་དུ་བྱ་བ་བྱུང་བའདུག་<sup>17)</sup>མེད་དེ།  
གཞན་དུ་ན་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་ཉི་མེག་མི་འཇུགས་པར་བཟང་དོ<sup>18)</sup>། <sup>19)</sup>

- 1) DP བཅུ་ 2) DNPT omit | 3) D འདུན་ 4) T རྣས་ 5) N བཟང་སུ་, RT བཟངས་སུ་
- 6) NT སྟུབས་ 7) DP omit | 8) NT insert | 9) P ཀྱི་ 10) N omits ཕྱེད་ 11) NT omit གོ་
- 12) NPRT | 13) NRT insert | 14) DP omit | 15) DNPT བ་འམ
- 16) NT omit | 17) NT དུ་ for ཀྱང་ 18) T མཚོད་ 19) P |

B-2 [9] དེ་ནས་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་བྱིན་གྱིས།<sup>1)</sup> རྒྱལ་པོ་སུ་ལྷུང་<sup>D197b</sup>ལ་འདི་རྒྱུད་ཅེས་སྤྲུལ་  
སོ<sup>2)</sup>། ། སུ་ལྷུང་ལྷུང་འདི་ཉིད་དུ་འདུག་ལ་\*དགའ་བ་<sup>3)</sup>སྤྱོད་ཅིག། འདོད་པའི་ཡོན་ཏན་ལྡེ་འཕྱོར་ཅིང་ལྷན་  
པས་ཅེད་མོ་བྱིས་ཤིག<sup>4)</sup>། དགའ་བར་<sup>5)</sup>སྤྱོད་ཅིག། དགའ་མགུར་<sup>6)</sup>སྤྱོད་ཅིག། དེས་ཆོགས་སུ་<sup>7)</sup>བཅད་དེ་<sup>8)</sup>  
སྤྲུལ་པ།

ཇི་ལྟར་སྤོང་དང་གིང་རྩ་དགའ། <sup>9)</sup>

དེ་ཞིག་<sup>8)</sup> དུས་ཀྱི་བརྟན་པོ་ལྟར། །  
 གཞན་དག་དབང་སྐྱུར་གང་ཡིན་པའི་<sup>9)</sup> ། །  
 གནས་ཀྱང་དེ་དང་འདྲ་བ་ཡིན། །  
 འདི་ནས་མི་ཐེ་ལར་སོང་ལ། །  
 དག་བ་མང་པོ་རྣམས་བྱ་སྟེ། །<sup>10)</sup>  
 བསོད་ནམས་བྱས་ཤིང་འཕྱོར་བྱས་ནས། །  
 མཐོ་རིས་སུ་<sup>11)</sup> རྗེ་འགྲོ་བར་བྱ། །

1) DNPT omit | 2) T omits ལྱུ་པོ་ 3) NT ལྷོ་མོ་ 4) PR insert | 5) NRT དགུར་  
 6) NPT ཚེགས་ 7) P omits | 8) NPT ཞིག་ 9) T བའི་ 10) P | 11) T རིས་

A 【16】 ཀུན་<sup>D56a</sup> དགའ་བོ་<sup>1)</sup> དེའི་ཚེ་<sup>2)</sup> དེའི་དུས་ན་<sup>3)</sup> ལྱུ་པོ་ལྷ་ཚེན་<sup>4)</sup> པོ་ཞེས་བྱ་བ་གང་གིས་དག་བའི་  
 ལམ་<sup>5)</sup> དེས་པ་དེ་ལ་ཞུགས་ཤིང་། གང་དག་བའི་ལམ་དེས་པ་ལ་ཞུགས་པ་ལ་བརྟེན་ནས།<sup>6)</sup> ལྷ་ཚེན་པོ་བརྒྱད་  
 ཁི་བཞི་རྩོང་མི་ཐེ་ལའི་ལྷ་ཚེན་པོའི་ཨ་མའི་ཚལ་འདི་ཉིད་དུ་ལྱུ་པོ་པོའི་དྲང་སྲོང་གི་ཚངས་པར་སྦྱོད་པ་སྦྱད་པར་  
 ལྷར་བ་<sup>7)</sup> བྱང་བ་གང་ཡིན་པ་<sup>8)</sup> དེ་གཞན་ཡིན་པ་<sup>9)</sup> ལྷམ་དུ་སེམས་<sup>10)</sup> རྗེ་འགྲོ་བྱས་དེ་ལྟར་མི་བལྟོལ། ། དེ་ཅིའི་  
 ལྷར་<sup>T188b</sup> ཞེ་ན། <sup>R60b</sup> ཀུན་དགའ་བོ་<sup>11)</sup> ཉིད་དེའི་ཚེ་དེའི་དུས་ན་ལྱུ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་ཞེས་བྱ་བར་ལྷར་བྱར་ཏེ།  
 ང་<sup>12)</sup> ཉིད་ཀྱིས་དག་བའི་ལམ་དེས་<sup>13)</sup> པ་དེ་སོལ་<sup>14)</sup> བཏོད་ཅིང་།<sup>15)</sup> དག་བའི་ལམ་<sup>16)</sup> དེས་པ་<sup>17)</sup> སོལ་དོད་

བརྟམ་པ་རེ་ཞིག་<sup>10)</sup> དུས་ཡིན་ལྟར། །  
 དེ་དང་འབྲེ་བར་གནས་འདི་ཡང་། །  
 དབང་ལོ་གཞན་དག་<sup>R267a</sup> ལྗུར་བས་བདག། །<sup>11)</sup>  
 འདི་ནས་མི་ཐེ་ལར་སོང་ནས། །<sup>12)</sup>  
 དགོ་བ་མང་པོ་རྣམས་བྱ་ཞིང་། །  
 བསོད་ནམས་ཐུན་སུམ་ཚོགས་བྱས་ནས། །  
 དེ་ནས་མཐོ་རིས་འོང་བར་བྱ་<sup>13)</sup>། །

atha śakro devānām indro nimimṛ rājānam idam avocat/ vasa nime ramasva  
 nime ihaiva pañcabhiḥ kāmagaṇaiḥ samanvitaḥ samanvaṅgībhūtaḥ krīḍa rama  
 paricārayeti/ <sup>1011.2</sup>sa gāthām bhāṣate/

yathā yācitaḥ bhāṇḍaṃ tāvatkālaratho yathā/  
 tathopamam idaṃ sthānaṃ pareṣāṃ vaśavarti<sup>14)</sup> yat//  
 ito' haṃ mithilāṃ gatvā kariṣye kuśalaṃ bahu/  
 āgamiṣye tataḥ svargaṃ kṛtapuṇyaḥ kṛtodayaḥ// iti/

<sup>58c21</sup> 爾時帝釋天主。告泥彌多主曰。汝可來至我宮。受我五欲天樂。歡娛遊戲。隨  
 意受樂。時王即以伽他答曰

如借他器物 依限終須送  
 天樂亦如足 猶如暫借物  
 我歸彌地羅 多造諸福業  
 當來彼宮內 承福生天上

1) DP omit | 2) N ལྗུར་ 3) DP བར་ 4) T འོག་ 5) P མགར་ for བར་ 6) NRT དགར་  
 7) NT ཚོགས་ 8) N བཅདེ་ 9) DNPRT | 10) NPT ཞིག་ 11) DNPRT | 12) T |  
 13) T བྱས་ 14) MS vaśavarta?

པ་ལ་བརྟེན་<sup>18)</sup>ནས།<sup>19)</sup> ལྷ་ཚེན་པོ་བརྒྱད་ཁྲི་བཞི་སྟོང་གིས་མི་ཐེ་ལ་འདི་ཉིད་ན་ལྷ་ཚེན་པོའི་ཨ་མའི་ཚལ་འདི་  
ཉིད་དུ་རྒྱལ་པོའི་བྱང་སྟོང་གི་<sup>20)</sup>ཚངས་པར་སྟོན་པ་སྤྱད་དོ། །

- 1) T དགའོ་ 2) D ཚེ་ 3) T inserts ། 4) T ཚེར་ 5) T ལས་ 6) DNPT omit །
- 7) DNRT བ་ 8) T བ་ 9) T བ་ 10) P ལྷམས་ 11) P དེ་ 12) P དེ་ 13) P དེས་
- 14) T བསོལ་ 15) DNPT omit ། 16) NT ལས་ 17) P དེས་བ་ 18) NT རྟེན་ 19) DP  
omit ། 20) NT གིས་

A [17] དེ་ཅིའི་ཕྱིར་ཞེན།<sup>N143b</sup> ཀྱུན་དགའ་བོ་<sup>1)</sup>དེའི་ཚེང་འདོད་ཆགས་དང་བཅས། ཞེ་སྤང་དང་  
བཅས། གཏི་སྤྱག་དང་བཅས་པར་གྱུར་ཏེ། སྐྱེ་བ་དང་<sup>2)</sup> ཁྲི་བ་དང་། རྩ་བ་དང་<sup>3)</sup> འཛི་བ་དང་<sup>4)</sup>  
ལྷ་ཚན་དང་། སྐྱེ་སྤྱགས་འདོན་པ་<sup>5)</sup>དང་། སྤྱག་བཟུལ་བ་དང་། ཡིད་མི་བདེ་བ་དང་། འབྲུག་པ་ལས་  
ཡོངས་སུ་<sup>6)</sup>མ་གྲོལ་ཞིང་།<sup>7)</sup> སྤྱག་བཟུལ་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>8)</sup>མ་<sup>9)</sup>གྲོལ་ལོ་ཞེས་གསུང་ངོ་<sup>10)</sup>། ། ཀྱུན་དགའ་  
བོ་<sup>11)</sup>དེ་ནི་ད་ཉིད་<sup>12)</sup>འཇིག་རྟེན་དུ་སྟོན་པ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་<sup>13)</sup>ཡང་<sup>P52a</sup>དག་པར་རྫོགས་  
པའི་སངས་རྒྱུ་རིག་པ་དང་ཞབས་སུ་<sup>14)</sup>ལྷན་པ་<sup>15)</sup>།<sup>16)</sup> བདེ་བར་གཤེགས་པ།<sup>17)</sup> འཇིག་རྟེན་མཁྱེན་  
པ།<sup>18)</sup> སྐྱེས་བུ་འདུལ་བའི་ཁ་ལོ་སྤྱར་བ་<sup>19)</sup>སྤྱ་ན་མེད་པ།<sup>20)</sup> ལྷ་དང་མི་རྣམས་ཀྱི་སྟོན་པ་<sup>21)</sup>སངས་རྒྱུ་  
བཅོམ་ལྷན་འདས་སུ་<sup>22)</sup>གྱུར་<sup>23)</sup>ནས།<sup>24)</sup> འདོད་ཆགས་དང་བྲལ། ཞེ་སྤང་དང་བྲལ། གཏི་སྤྱག་དང་བྲལ་  
བས།<sup>25)</sup> སྐྱེ་བ་དང་། ཁྲི་བ་དང་།<sup>26)</sup> རྩ་བ་དང་།<sup>27)</sup> འཛི་བ་དང་། ལྷ་ཚན་དང་།<sup>28)</sup> སྐྱེ་སྤྱགས་  
འདོན་པ་དང་། སྤྱག་བཟུལ་བ་དང་།<sup>29)</sup> ཡིད་མི་བདེ་བ་དང་།<sup>R61a</sup> འབྲུག་པ་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>30)</sup>གྲོལ་  
ཞིང་།<sup>31)</sup> སྤྱག་བཟུལ་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>32)</sup>གྲོལ་ལོ་<sup>33)</sup>ཞེས་གསུང་ངོ་། །

- 1) T དགའོ་, NT insert ། 2) N omits ། 3) NT omit ། 4) NT omit ། 5) T འདོད་བ་
- 6) NT ཡོངས་ 7) DNPT omit ། 8) NPT ཡོངས་ 9) P སུ་ 10) N གསུངོ་ 11) T དགའོ་
- 12) DP omit ཉིད་ 13) PT བ་ 14) NT ཞབས་ 15) T བ་ 16) NT omit ། 17) NT omit  
། 18) NT omit ། 19) DR insert ། 20) NT omit ། 21) DP insert ། 22) T འདས་
- 23) DP བྱུང་ 24) DP omit ། 25) DNPT omit ། 26) N omits ། 27) NT omit །
- 28) NT omit ། 29) NT omit ། 30) NPT ཡོངས་ 31) DNPT omit ། 32) N ཡོངས་, T  
omits ཡོངས་ 33) P གྲོལོ་

A [18] ཀྱུན་དགའ་བོ་<sup>1)</sup>དེ་<sup>2)</sup>ལྷར་<sup>3)</sup>ན་ཡང་ངས་དགོ་<sup>4)</sup>བའི་ལམ་ངེས་པ་<sup>5)</sup>སྟོལ་བཏོད་པ་དེ་ལ་བརྟེན་  
ནས་<sup>6)</sup>སེམས་ཅན་སྐྱེ་བའི་ཚོས་ཅན་རྣམས་ནི་སྐྱེ་བའི་ཚོས་ཉིད་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>7)</sup>གྲོལ་བར་འབྱུར། སེམས་ཅན་  
རྩ་བ་<sup>T189a</sup>དང་། རྩ་བ་དང་། འཛི་<sup>D56b</sup>བ་དང་། ལྷ་ཚན་དང་། སྐྱེ་སྤྱགས་འདོན་པ་<sup>8)</sup>དང་། སྤྱག་  
བཟུལ་བ་དང་། ཡིད་མི་<sup>N144a</sup>བདེ་བ་དང་། འབྲུག་པའི་ཚོས་ཅན་རྣམས་ནི་འབྲུག་པའི་ཚོས་ཉིད་ལས་  
ཡོངས་སུ་<sup>9)</sup>གྲོལ་བར་འབྱུར། ངས་དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་ལ་ལྷགས་ཤིང་།<sup>10)</sup> དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་ལ་

ལྷགས་པ་<sup>11)</sup>དེ་ལ་བརྟེན་ནས།<sup>12)</sup> སེམས་ཅན་སྐྱེ་བའི་ཚེས་ཅན་ནས།<sup>13)</sup> སེམས་ཅན་འབྲུག་པའི་ཚེས་ཅན་  
སྐྱེ་<sup>14)</sup>བར་དག་འབྲུག་པའི་ཚེས་ཉིད་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>15)</sup>གོལ་<sup>16)</sup>བར་འབྱུར་བ་དེ་གང་ཡིན་ཞེ་ན།<sup>17)</sup> འདི་ལྟ་  
སྟེ། འཕགས་པའི་ལམ་ཡན་ལག་བརྒྱད་པ་ཡིན་ཏེ། འདི་ལྟ་སྟེ། ཡང་དག་པའི་ལྷ་བ་དང་། ཡང་དག་པའི་  
རྟོག་པ་དང་། ཡང་དག་པའི་ངག་དང་། ཡང་དག་པའི་ལམ་གྱི་མཐའ་དང་། ཡང་དག་པའི་འཚོ་བ་དང་།  
ཡང་དག་པའི་རྩོལ་བ་དང་། ཡང་དག་པའི་དུན་པ་<sup>18)</sup>དང་། ཡང་དག་པའི་རྟིང་<sup>19)</sup>དེ་འཛིན་ཏེ་<sup>20)</sup>། འདི་  
ནི་ངས་དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་ལ་ལྷགས་པ་<sup>21)</sup>དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་ལ་ལྷགས་པ་དེ་ལ་བརྟེན་ནས།<sup>22)</sup> སེམས་  
ཅན་སྐྱེ་བའི་ཚེས་ཅན་ནས།<sup>23)</sup> གོང་མ་བཞིན་དུ་འབྲུག་པའི་ཚེས་ཉིད་ལས་ཡོངས་སུ་<sup>24)</sup>གོལ་བར་འབྱུར་བའི་  
R61b བར་ཡིན་ནོ། །

- 1) T དགའོ་ 2) NRT དེ་ 3) T ལྟ་ 4) N དེག་ 5) T བ་ 6) NRT insert ། 7) NT ཡོངསུ་
- 8) T བ་ 9) NT ཡོངསུ་ 10) DPT omit ། 11) NT insert ། 12) DNPT omit །
- 13) DP omit ། 14) N ལྱིས་ 15) NT ཡོངསུ་ 16) P དགོལ་, R འགོལ་ 17) DP omit །
- 18) T བ་ 19) N རྟིང་ 20) P དང་ 21) DP ། for བ་ 22) DP omit ། 23) DNPT omit །
- 24) NPT ཡོངསུ་

A [19] ལྷན་དགའ་བོ་ཁྱོད་ཀྱིས་ཀྱང་དེ་བཞིན་དུ་དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་སྟོལ་དོད་པ་དེ་ལྟ་བུའི་རྗེས་བསམ་བ་  
པར་བྱའི་<sup>1)</sup>།<sup>2)</sup> ལྷན་<sup>3)</sup>ཆད་པར་མ་བྱེད་ཅིག།<sup>4)</sup> ལྷོས་བུ་ཐ་ཤལ་དུ་ལྱུར་པར་མ་བྱེད་ཅིག །ལྷན་དགའ་བོ་<sup>5)</sup>  
གང་ལ་ལ་<sup>N144b</sup>དེ་ལྟ་བུའི་ཉན་ཐོས་བཟང་པོ་རྒྱད་དུ་<sup>6)</sup>བྱུང་བའི་དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་སྟོལ་དོད་པ་དེ་ལྟ་བུའི་  
རྗེས་<sup>P52b</sup>མི་འཚོ་བ་<sup>7)</sup>དེ་ནི།<sup>8)</sup> དེ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱན་གཅོད་པ་ཡིན་ཞིང་<sup>9)</sup>། དེ་དེ་རྣམས་<sup>T189b</sup>ཀྱི་སྐྱེས་བུ་ཐ་  
ཤལ་དུ་ལྱུར་བ་<sup>10)</sup>ཡིན་ནོ།<sup>11)</sup>། དེ་བས་ན་ང་ཁྱོད་ལ་འདི་སྐད་དུ།<sup>12)</sup> ཅི་རམས་ཀྱང་ཁྱོད་ཀྱིས་དེ་ལྟ་བུའི་ཉན་  
ཐོས་བཟང་པོ་རྒྱད་དུ་<sup>13)</sup>བྱུང་བའི་ལམ་ངེས་པ་སྟོལ་དོད་པ་དེ་ལྟ་བུ་དེའི་རྗེས་སོ་བས་ཤིག །རྒྱན་ཆད་པར་<sup>14)</sup>མ་  
བྱེད་ཅིག །སྐྱེས་བུ་ཐ་ཤལ་དུ་ལྱུར་པར་མ་བྱེད་ཅིག་ཅེས་སྟེ། །

- 1) NT བྱ་བའི་ 2) DNPT omit ། 3) T ལྷན་ 4) N omits ། 5) T དགའོ་ 6) NT ལྷན་དུ་,
- P ལྷན་དུ་, R བརྒྱད་དུ་ 7) DNPT འཚོ་བ་ 8) DP omit ། 9) N རོ་ for ཞིང་ 10) PRT བ་
- 11) N ཡིནོ 12) D omits ། 13) N ལྷན་དུ་, R བརྒྱད་དུ་ 14) T བར་

B-1 【1】 ལྷལ་པོ་<sup>1)</sup>ཚེན་པོ་<sup>2)</sup>གཞན་ཡང་ངས་སྒྲ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་ཚུབ་དོན་དུ་  
གཉེར་བའི་ཕྱིར་<sup>3)</sup>སྦྱིན་པ་<sup>4)</sup>དག་བཏང་།<sup>5)</sup> བསོད་ནམས་དག་བྱས་པ་གང་ཡིན་པ་<sup>6)</sup>དེ་ཉོན་ཅིག།

punar api mahārāja yan mayā anuttarāṃ samyaksambodhiṃ prārthayatā  
1010.5 dānāni dattāni puṇyāni kṛtāni/ tac chrūyatām/

<sup>58b28</sup> 佛告大王。我爲求無上菩提故。修行布施作諸福業。大王諦聽。

1) R པོ 2) T omits ཚེན་པོ་ 3) NT insert ། 4) T པ་ 5) D omits ། 6) T བ་

B-1 【8】 དེ་ནས་ལྷལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོས་<sup>1)</sup>བདག་ཉིད་ཀྱི་<sup>2)</sup>མཚོད་སྦྱིན་ཡུན་སྲུང་ཚོགས་<sup>3)</sup>པར་<sup>4)</sup>མཐོང་ནས་  
ཚོགས་སུ་<sup>5)</sup>བཅད་དེ་<sup>6)</sup>སྤྲོས་པ།

ལྷ་དང་མི་<sup>R264bཡི་7)</sup>ནང་དག་ཏུ།  
དབང་<sup>8)</sup>ལྷག་དོན་དུ་གཉེར་བ་དང་།<sup>9)</sup>  
དབུལ་བའི་<sup>10)</sup>འཇིགས་པས་སྤྲག་པ་ཡིས།<sup>11)</sup>  
ཅི་རུས་ཀྱིས་ནི་སྦྱིན་པ་གཏང་།<sup>12)</sup>།<sup>13)</sup>  
འཇིག་རྟེན་ནི་སྦྱིན་བྱེད་མཚོད།  
སྦྱིན་བྱེད་ལྷ་ཡི་<sup>14)</sup>ནང་མཚོད་དེ།<sup>15)</sup>  
བྱ་ཡི་<sup>16)</sup>འབྲས་ལྷན་གིང་བཞིན་དུ་<sup>17)</sup>།<sup>18)</sup>  
འབྲུང་པོ་ཀུན་གྱི་སྐབས་འོས་ཡིན།

sa ātmano yajñasampadaṃ drṣṭvā gāthāṃ bhāṣate/  
1010.6 aiṣvaryaṃ prārthayamānena deveṣu manuṣeṣu ca/  
dānaṃ deyaṃ yathāśaktyā dāridrabhayabhīruṇā//  
loke saṃpūjyate dātā dātā deveṣu pūjyate/  
śaraṇyaḥ sarvabhūtānāṃ pakṣiṇāṃ vā phaladrumaḥ// iti/

<sup>58c1</sup> 其土自見己身有大受用。作諸祭祠之法。而說伽他曰

若心求大富 天上及人間  
隨力應行施 爲畏貧窮故  
施者人所奉 後必受天供  
人非人歸依 如雨能成實

1) NT པོ 2) NT omit ཀྱི་, R ཀྱིས་ 3) D ཚོགས་ 4) DP པ་ 5) N ཚོགས་ 6) N བཅད་དེ་  
7) P མི་ཡིན་, T མིའི་ 8) NRT དགལ་ 9) T ། 10) R སུའི་ 11) T ། 12) NRT བཏང་  
13) T ། 14) T ལྷའི་ 15) T ། 16) NRT ཡིས་ 17) R ཏུ་ 18) T །



B-1 【9】 ལྷུལ་པོ་ཚེན་པོ་དེའི་ཚེ་དེའི་དུས་ན།<sup>1)</sup> ལྷུལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་ཞེས་བྱ་བ་འཁོར་ལོས་<sup>2)</sup>སྐྱུར་བའི་  
 ལྷུལ་པོ་གང་གིས་དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་དེ་སོལ་བའོད་<sup>3)</sup>ཅིང་།<sup>4)</sup> དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་སོལ་བའོད་<sup>5)</sup>པ་དེ་<sup>6)</sup>  
 ལ་བརྟེན་ནས།<sup>7)</sup> ལྷ་ཚེན་པོ་བརྒྱུད་ཁྲི་བཞི་སྟོང་གིས་ལྷུལ་པོའི་དྲང་སྟོང་གི་<sup>8)</sup>ཚངས་པར་སྐྱོད་པ་སྐྱུད་པ་དེ་  
 གཞན་<sup>T3841</sup>ཞིག་ཡིན་སྟེ་ལྷུལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་དེ་ལྷ་ཚེན་པོ་བའོད་<sup>9)</sup> ང་ཉིད་དེའི་ཚེ་དེའི་དུས་ན།<sup>10)</sup>འཁོར་ལོས་<sup>11)</sup>  
 ལྱུར་<sup>12)</sup>བའི་ལྷུལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་ཞེས་བྱ་བར་ལྷུར་ཏེ།<sup>13)</sup> ང་ཉིད་ལྷུལ་དགོ་བའི་<sup>14)</sup>ལམ་ངེས་པ་དེ་<sup>D196a</sup>སོལ་  
 བའོད་<sup>15)</sup>ཅིང་<sup>16)</sup>།<sup>17)</sup> དགོ་བའི་ལམ་ངེས་པ་སོལ་<sup>18)</sup>བའོད་པ་<sup>19)</sup>དེ་ལ་བརྟེན་ནས།<sup>20)</sup> ལྷ་ཚེན་པོ་བརྒྱུད་  
 ཁྲི་<sup>21)</sup>བཞི་སྟོང་གིས་<sup>22)</sup>ལྷུལ་པོའི་དྲང་སྟོང་གི་<sup>23)</sup>ཚངས་པར་སྐྱོད་པ་སྐྱུད་དོ།

syāt khalu te mahārājanyaḥ sa <sup>1010.7</sup>tena kālena tena samayena mahādevo  
 nāma rājā cakravartī yena taṃ niyataṃ kalyāṇaṃ vartma pravartitaṃ yan  
 niyataṃ kalyāṇaṃ vartma pravṛttam āgamyā caturaśītir mahādevasahasrāṇi  
 rājarṣayo brahmacaryam acārṣur iti/ na khalv evaṃ <sup>1010.8</sup>draṣṭavyam/ aham  
 eva sa tena kālena tena samayena mahādevo nāma rājābhūc cakravartī/  
 mayaiva tan niyataṃ kalyāṇaṃ vartma pravartitaṃ yan niyataṃ kalyāṇaṃ  
 vartma pravṛttam āgamyā caturaśītir mahādevasahasrāṇi rājarṣayo brahma-  
 caryam acārṣuḥ/

<sup>58c8</sup> 佛告大王。勿作異念。彼時大天轉輪王者。決向善道。常修梵行。八萬四千生  
 中。常得轉輪王位。大王。莫作異念。爾時轉輪王者。即我身是。

- 1) R ||, DP omit | 2) N ལོ་ 3) PT གའོད་ 4) DNPT omit | 5) P གའོད་ 6) P omits དེ་ 7) DNPT omit | 8) NRT གིས་ 9) P omits | 10) NT insert | 11) N ལོ་ 12) N ལྱུར་ 13) N ཏེ། | 14) NT insert ལས་ཀྱི་ 15) PT གའོད་ 16) T ཅིག་ 17) DP omit | 18) R སོལ་ 19) P བ་ 20) DP omit | 21) P ཁྲིད་ 22) D གི་ 23) T གིས་

B-1 【10】 ལྷུལ་པོ་ཚེན་པོ་ངས་<sup>1)</sup>སྐྱུན་པའམ་<sup>2)</sup>སྐྱིན་པའི་བགོ་བཤམ་དེས།<sup>3)</sup> ལྷ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་  
 པར་ཚོགས་པའི་བྱང་རྒྱུབ་ཐོབ་པོ་སྟེ་ལྷུལ་པོ་ལྷ་ཚེན་པོ་དེ་ལྷ་ཚེན་པོ་བའོད་<sup>4)</sup>སྟེ། འོན་ཀྱང་ངའི་སྐྱིན་པ་དེ་ནི་སྐྱུན་  
 མེད་པ་ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་བྱང་རྒྱུབ་ཀྱི་རྒྱ་ཚམ་དང་། རྒྱུན་ཚམ་དང་། རྒྱུན་ཚམ་ཡིན་ཏེ།<sup>5)</sup>།

syāt khalu te <sup>1010.9</sup>mahārāja tena mayā dānena vā dānasamvibhāgena vā  
 anuttarā samyaksambodhir adhigateti/ na khalv evaṃ draṣṭavyam/ api tu  
 taddānam anuttarāyāḥ<sup>6)</sup> samyaksambodher hetumātrakaṃ pratyayamātrakaṃ  
 sambhāramātrakaṃ/

<sup>58c11</sup> 復次大王。我豈唯以此施。證無上覺。而更修無量福業因緣。積集善根故。起  
 正信故。得證無上正等正覺

- 1) P མངས་ 2) NP པའམ།, T བ་འམ་ 3) DNPT omit | 4) P ལྷ་ 5) N ལོན་ 6) MS

anuttarāyāṃ

B-2 【1】 ལྷལ་པོ་ཚེན་པོ་གཞན་ཡང་ངས་སྤྲོ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་དོན་<sup>1)</sup> ཏུ་གཉེར་བའི་ཕྱིར་སྦྱིན་པ་<sup>2)</sup> དག་བཏང་། བསོད་ནམས་དག་བྱས་པ་གང་ཡིན་པ་<sup>3)</sup> དེ་ཉོན་ཅིག་<sup>4)</sup>

punar aparaṃ mahārāja yan mayā anuttarāṃ <sup>1010.10</sup> samyaksambodhim abhiprārthayatā dānāni dattāni puṇyāni kṛtāni/ tac chrūyatām/

<sup>58c14</sup> 佛告大王。我昔爲求無上菩提故。修行布施。作諸福業。大王諦聽。

1) N omits དོན་ 2) T བ་ 3) T བ་ 4) R ། །

B-2 【8】 དེ་ནས་ལྷལ་པོ་སྤྱུ་ཏུ་ད་ཀྱིས་བདག་ཉིད་ཀྱི་མཚོན་སྦྱིན་ཕུན་སུམ་ཚོགས་པ་མཐོང་ནས་<sup>1)</sup> དེའི་ཚེ་ཚོགས་སུ་<sup>2)</sup> བཅད་དེ་<sup>3)</sup> སྦྱས་པ།

དགོ་ལས་བྱས་དང་དེ་བཞིན་དུ། །

<sup>N374a</sup> མི་དགའི་<sup>4)</sup> ལས་བྱས་<sup>5)</sup> མཐོང་ནས་ནི་<sup>6)</sup> ། །

མི་གང་བག་མེད་བྱེད་པ་དེ། །

སྦྱིས་བྱ་བ་<sup>T386b</sup> བཤམ་སྤོང་རེ་རྗེ། །

so 'py ātmano yajñasampadam dṛṣṭvā gāthāṃ bhāṣate/

<sup>1011.1</sup> śubhakarmakṛto dṛṣṭvā tathāpy aśubhakarmaṇaḥ/

ye pramādyanti manujaḥ śocyās te puruṣādhamāḥ// iti/

<sup>58c17</sup> 其王自見己身有大受用。作俗間祭祀之法。布施一切。而說頌曰

若見作善法 隨他還作善

懈怠不作者 足卑下丈夫

1) DP omit ། 2) NPT ཚོགས་ 3) N བཅད་ 4) N དགོ་བའི་, T དགོ་བའི་ 5) NT omit བྱས་

6) NT omit ནི་

B-2 【10】 དེ་མི་ཐི་ཡར་འོངས་<sup>1)</sup>ནས་སྦྱིན་པ་དག་བཏང་།<sup>2)</sup> བསོད་ནམས་དག་བྱས་ནས་<sup>3)</sup> ཚིགས་  
སྤྲུ<sup>4)</sup>བཅད་དེ་<sup>5)</sup>སྐྱས་པ།<sup>6)</sup>

གང་ཚེ་རྒྱལ་རིགས་བྱས་ཟེ་དང་། །  
རྗེ་འཇུག་རིགས་དམངས་རིགས་<sup>7)</sup>གཤོལ་པ་<sup>8)</sup>དང་། །  
གྲུ་གྲོ་ཡོངས་<sup>9)</sup>ལ་སྦྱིན་<sup>10)</sup>པ་ནི་<sup>11)</sup>། །  
སྦྱིན་པ་<sup>12)</sup>དམ་པ་རྣམས་ཀྱིས་<sup>13)</sup>བཟླགས། །<sup>14)</sup>  
སྤྲུ་གཤི་ཚེ་ན་སྦྱིན་བྱིན་ཞིང་། །  
སྦྱོ་བོ་དམ་པ་ཚོས་བྱས་ནས། །  
ངན་སོང་རྣམས་སྤངས་འདི་དང་ནི། །  
མགོ་རིས་སྤྲུ་<sup>15)</sup>ཡང་བཀུར་བ་ཡིན། །  
ཕན་ཡོན་འདི་ནི་<sup>16)</sup>ཤེས་ནས་<sup>17)</sup>ཀྱང་། །  
མཁས་པ་རྣམས་ཀྱིས་སྦྱིན་པ་<sup>18)</sup>གཏང་<sup>19)</sup>། །<sup>20)</sup>  
སྦྱིན་པ་<sup>21)</sup>ཡིས་ནི་ཐར་བ་<sup>22)</sup>དང་། །<sup>23)</sup>  
དབང་ཕྱག་ལྷ་གནས་འབྱོར་བར་<sup>24)</sup>འཕྱར། །

sa mithilām āgatya dānāni dattvā puṇyāni kṛtvā gāthām <sup>1011.3</sup>bhāṣate/  
santo dānaṃ praśaṃsanti yad āpatsu pradīyate/  
kṣatriye brāhmaṇe vaiśye śūdre caṇḍālapukkase//  
dānaṃ dattvā ca durbhikṣe tarpayitvā ca sajjanān/  
apāyān varjayitveha svargaloke mahīyate//  
ānuśaṃsam imaṃ jñātvā dānaṃ deyaṃ manīṣibhiḥ/  
dānāt saṃpadyate mokṣaś <sup>1011.4</sup>caisvaryaṃ ca surālayaḥ// iti/

58c28 爾時彌地羅歸本城已。修行布施。作諸福業。而說頌曰

善仁讚行施 隨時而行捨  
剎利梵薛舍 施茶成達陀  
飢儉時行捨 行者令充足  
當離惡趣中 必得生天上  
智者知此德 施者能為捨  
由施得解脫 富貴而生天

1) N འོང་ 2) T ། ། 3) DP omit | 4) NT ཚིགས་ 5) N བཅད་ 6) T ། ། 7) NT omit  
རིགས་ 8) P བ་ 9) R འོངས་ 10) DP བྱིན་ 11) DP ཡི་ 12) T བ་ 13) NP ཀྱི་ 14) P  
། 15) N རིས་ 16) T ལྷ་ 17) T ལྷ་ 18) T བ་ 19) NRT བཏང་ 20) P ། 21) T བ་  
22) DNT བ་ 23) P ། 24) DNRT བར་

B-2 【11】 <sup>N374b</sup> ལྷལ་པོ་ཚེ་པོ་དེ་ཚེ་དེ་དེ་དུས་ན་<sup>1)</sup>འཁོར་ལོས་<sup>2)</sup>སྐྱར་བའི་ལྷལ་པོ་ལྷ་ཡུང་ཅེས་བྱ་  
 བ་<sup>3)</sup>གང་གིས་སྐུམ་ཅུ་<sup>4)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ལང་དུ་སོང་ནས།<sup>5)</sup> ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་བརྒྱ་ཕྱིན་  
 རྒྱུས་<sup>6)</sup>སྣན་ཕྱེད་དང་། ལྷ་རྣམས་ཀྱི་འདོད་པའི་ཡོན་ཏན་ལྡས་བསྐྱབས་ནས། དེས་མི་བྲི་ལར་འོངས་ནས་<sup>7)</sup>  
 ལྷོང་<sup>8)</sup>ཁྲིར་<sup>9)</sup>ལྷོ་སྐོར་བཞིར་མཚོན་སྤྱོད་ཀྱི་གནས་བརྩེས་པ་དག་བསྟངས་<sup>10)</sup>། བསོད་ནམས་དག་བྱས་  
<sup>P186b</sup>པ་དེ་<sup>T387a</sup>གཞན་ཞིག་ཡིན་སྐུམ་ན།<sup>11)</sup> འོད་ཀྱིས་དེ་ལྟར་མི་བལྟ་<sup>12)</sup>། ལྷོ་ལྷང་ངའི་ཉིད་དེ་ཚེ་  
 དེ་དུས་ན།<sup>13)</sup> འཁོར་ལོས་<sup>14)</sup>སྐྱར་བའི་ལྷལ་པོ་ལྷ་ཡུང་ཅེས་བྱ་བ་གང་གིས་<sup>15)</sup>སྐུམ་ཅུ་<sup>16)</sup>ཅ་གསུམ་པའི་ལྷ་  
 རྣམས་ཀྱི་ལང་དུ་<sup>17)</sup>སོང་ནས།<sup>18)</sup> ལྷ་རྣམས་ཀྱི་དབང་པོ་<sup>19)</sup>བརྒྱ་ཕྱིན་རྒྱུས་<sup>20)</sup>R267b སྣན་ཕྱེད་དང་།<sup>21)</sup> ལྷ་  
 རྣམས་ཀྱི་འདོད་པའི་ཡོན་ཏན་ལྡས་བསྐྱབས་པ་ཡིན་པར་གྱུར་ཏེ་<sup>22)</sup> ང་ཉིད་དེ་ནས་མི་བྲི་ལར་སོང་ནས།<sup>23)</sup>  
 ལྷོང་ཁྲིར་ལྷོ་སྐོར་བཞིར་མཚོན་སྤྱོད་ཀྱི་<sup>24)</sup>གནས་བརྩེས་ཏེ་<sup>25)</sup>སྤྱོད་<sup>D198a</sup>པ་དག་ཕྱིན། བསོད་ནམས་དག་  
 བྱས་སོང་། །

syāt khalu te mahārājānyaḥ sa tena kālena tena samayena nimir  
 nāma rājābhūc cakravartī yo devāṃs trayastrimśaṃ gataḥ śakrena  
 devendreñārdhāsänenopanmantrito divyais ca pañcabhiḥ kāmagaṇaiḥ  
 samanvitaḥ <sup>1011.5</sup>samanvaṅgbhūtaḥ kṛdītavān/ [na khalv evaṃ draṣṭavyam/]  
 aham eva sa tena kālena tena samayena/ mayaiva tāni mithilām āgatya  
 caturṣu nagaradvāreṣu yajñavātān māpayitvā dānāni dattāni puṇyāni kṛtāni/

<sup>59a7</sup> 佛告大王。勿作異念。往時泥彌轉輪王。往二十三天。帝釋請分座而坐。受五  
 欲樂。猶於彌地羅城門所置祭堂。依法祭祀。行施修諸福業者。即我身是

1) R inserts ། ། 2) N ལོ་ 3) T བ་ for བྱ་བ་ 4) DP བུ་ 5) DNP omit །, T omits ལྷ་  
 རྣམས་ཀྱི་ལང་དུ་སོང་ནས། 6) NT ལྷོ་ 7) DP ཏེ་ for རྣམ་ 8) P ཁྲོང་ 9) R ཁྲེད་ 10) P དང་  
 11) DP omit ། 12) NPT ལྷོ་ 13) DP omit ། 14) N ལོ་ 15) N ལྷོ་ 16) DP བུ་  
 17) T ལོ་ 18) DP omit ། 19) R ལོ་ 20) NT ལྷོ་ 21) DP omit ། 22) N omits །  
 23) DP omit ། 24) P ལྷོས་ 25) NT insert ། 26) N ལྷོསོ་

B-2 【12】 ལྷལ་པོ་ཚེ་པོ་ངས་སྤྱོད་པའམ་<sup>1)</sup>སྤྱོད་པའི་<sup>2)</sup>བཞོ་<sup>3)</sup>བཤའ་དེས།<sup>4)</sup> ལྷ་ན་མེད་པ་ཡང་དག་  
 པར་ཚོགས་པའི་བྱང་ལྷལ་ཐོབ་པོ་<sup>5)</sup>སྐུམ་ན།<sup>6)</sup> འོད་ཀྱིས་དེ་ལྟར་མི་བལྟ་<sup>7)</sup>། ལྷོ་ལྷང་ངའི་སྤྱོད་པ་དེ་ཚེ་  
 ལྷོ་ལྷང་བ་<sup>8)</sup>ཡང་དག་པར་ཚོགས་པའི་བྱང་ལྷལ་གྱི་རྒྱ་ཙམ་དང་། ལྷོ་ལྷང་དེ་ལྷོ་ལྷང་གི་  
 ལྷོ་ལྷང་གི་ཙམ་ཡིན་ཀོ། །

syāt khalu te mahārāja tena dānena vā dānasamvibhāgena <sup>1011.6</sup>vā anuttarā  
 samyaksambodhir adhigateti/ na khalv evaṃ draṣṭavyam/ api tu taddānam  
 anuttarāyāḥ samyaksambodher hetumātrakaṃ pratrayamātrakaṃ sambhāra-  
 mātrakam/

<sup>59a11</sup> 佛告大王。非唯緣此行施福業。而證正覺。大王。勿作異見。而因行施故。起

正信故。積聚善根故。今得正覺

- 1) PR བ་ལམ་, N བ་ལམ།, T བ་ལེམ། 2) T བའི་ 3) P མག་ 4) DNPT omit ། 5) NP ལོ་  
6) DP omit ། 7) NPT ལྟ་ 8) T omits ལྷ་ན་མེད་པ་ 9) P ཚོགས་